

第28号議案

文京区指定文化財の指定について

上記の議案を提出する。

令和7年3月26日

提 出 者    文 京 区 教 育 委 員 会

教 育 長    丹羽 恵玲奈

## 文京区指定文化財の指定について

「心城院版木」は、文京区文化財指定基準（昭和 54 年 4 月 2 日文教委告示第 1 号 平成 4 年 4 月 1 日文教委告示第 11 号により改正）を十分に満たす文化財であるため、文京区文化財保護条例（平成 4 年 3 月 31 日条例第 28 号）第 4 条第 3 項の規定に基づき、文京区指定文化財に指定する。

### 1 心城院版木 59 枚 付 御鬩筆筒 1 棹

#### (1) 種別

有形文化財（歴史資料）

#### (2) 名称

心城院版木 付 御鬩筆筒

#### (3) 指定理由

本版木は、心城院が弁財天信仰および歓喜天信仰の寺院であることを背景として、それらの信仰に関連するものが多く、同寺での宗教活動をうかがうことができる。なかでも御鬩の版木は、墨書銘によって文政 8 年（1825）の開版が判明し、同年に制作された御鬩筆筒とともに同寺における什物の整備、御鬩の頒布といった動向を知ることができる。これらは、心城院の歴史を考える上で重要な資料であるとともに、庶民の信仰および印刷文化の歴史を知る上でも貴重な資料である。

このように、本版木は貴重な文化財であり、指定文化財とすることは妥当であると考えられる。

#### (4) 告示日

令和 7 年 6 月 2 日

#### (5) 所有者

宗教法人心城院（湯島三丁目 32 番 4 号）

#### (6) 所蔵先

湯島三丁目 32 番 4 号 心城院

### 2 文京区文化財保護審議会委員

会 長 谷 川 章 雄（早稲田大学名誉教授）

副会長 藤井 英二郎（千葉大学名誉教授）

委 員 岩 淵 令 治（学習院女子大学国際文化交流学部教授）

内田 青蔵（神奈川大学特任教授）  
佐藤 信（東京大学名誉教授）  
副島 弘道（大正大学名誉教授）  
山崎 祐子（一般財団法人 宮本記念財団理事）

### 3 文京区文化財保護審議会からの建議書（写）

#### 別紙1 建議文（写）のとおり

本文化財について、文京区教育委員会（以下「教育委員会」という。）は、区指定文化財に指定するに相応しいものであるか等を判断するため、その詳細について調査・審議するように文京区文化財保護審議会（以下「審議会」という。）に諮問した。

諮問を受けた審議会は、慎重に資料の文化的価値等について調査・審議した結果、文京区文化財指定基準を十分に満たす文化財であると認めた。

これに基づき、令和7年2月26日付、建議書により区指定文化財に指定するよう教育委員会あて建議したものである。

### 4 指定説明書

#### 別紙2 のとおり

令和7年2月26日

文京区教育委員会 殿

文京区文化財保護審議会  
会長 谷川 章雄



文京区指定文化財（有形文化財）の指定について（建議）

令和6年9月26日付で文京区教育委員会から調査・審議の諮問を受けた宗教法人心城院所有の「心城院版本 付 御鬺筆笥」の文京区指定文化財への指定について、慎重に文化財的価値を調査・審議した結果、「文京区文化財指定基準」を十分に満たし、指定するに相応しい貴重な有形文化財であることを認め、指定名称等を下記のとおりとし、文京区教育委員会に建議いたします。

記

1 文京区指定文化財の指定名称および員数（案）

|        |      |
|--------|------|
| 心城院版本  | 59 枚 |
| 付 御鬺筆笥 | 1 棹  |

## 文京区指定有形文化財 指定説明書

- (1) 名 称 心城院版木 付 御圖筆筥  
(2) 員 数 59 枚・1 棹  
(3) 区 分 有形文化財（歴史資料）  
(4) 所有者 宗教法人 心城院  
(5) 所在地 湯島三丁目 32 番 4 号 心城院  
(6) 法 量

(版木) 表 1 参照。

(御圖筆筥) 高 74.6 cm 幅 78.5 cm 奥行 29.3 cm

### (7) 材質・形状

(版木) サクラ材製（推定）

(御圖筆筥) ヒノキ材製（推定）。漆塗。2 列 17 段、都合 34 本の抽斗をつける。各抽斗の前板前面中央に金具のつまみをつける（後補）。各抽斗の内側は、二つの仕切りによって中を三分し、御圖を 3 番ずつ入れる。

### (8) 銘 文

(版木) 表 1 および資料 1 参照。

(御圖筆筥) 各抽斗の前板前面に、中に入れる御圖の番号が白墨で記され、先板後面には抽斗の配置（例えば右列一段目は「右一」など）が墨書で記される。また、左列最下段の抽斗の底板上部に次の銘がある。

「文政八乙酉載六月 講中造之

権大僧都堅者法印

義山 豪榮代

柳井堂什物 』

さらに底面には、次の修理銘が白墨で記される。

「大正五年十二月廿日

当山十七世賢妙代

塗替」

### (9) 保存状態

版木は、茶箱 1 箱等に入れられ、本堂背後の倉庫に収められている。御圖筆筥は本堂外陣に置かれ、現在でも近年印刷された御圖を入れるための御圖筆筥として使用されている。

版木は、端食や下部等に虫損が認められるものがあるほか、白黴が生じているものがあり、今後の保管に留意する必要がある。

御圖筆筥は、一部に虫損が認められる。抽斗のつまみ金具後補。大正 5 年（1916）12 月塗替。

### (10) 時 代

版木は、江戸時代後期～昭和（墨書等により年代が判明するものに、文政 8 年（1825）9 月、文久元年（1861）、大正 6 年（1917）4 月、昭和 28 年（1953）12 月がある。）。御圖筆筥は、江戸時代後期（文政 8 年 6 月）。

### (11) 説 明

本版木を蔵版する心城院は、湯島天満宮男坂下に所在する天台宗寺院である。元禄 7 年（1694）湯島天神別当喜見院第三世宥海の開基と伝わる。かつては宝珠弁財天堂と称し、湯島天神に属す一堂宇であった（「寺社

書上」国立国会図書館蔵)。のちに柳井堂とも称し、明治時代以降に心城院と称して現在に至る。本尊は大聖歓喜天(聖天) およびその本地仏である十一面観音、相殿として弁財天を祀る。

心城院版木は、内容面から①仏像類 4 種 4 枚、②經典類 7 種 18 枚、③札類 13 種 13 枚、④御圖 1 種 17 枚、⑤その他 7 種 7 枚に大別される。

① 仏像類に分別したのは、4 種 4 枚である。

No.1「弁財天坐像」は、弁財天の御影である。正面上部に琵琶を弹奏する弁財天坐像を置き、その下に大黒天・毘沙門天を置く。

No.2「童子経曼荼羅図」は、「護諸童子陀羅尼經」(護諸童子經)に基づき構成された図像である。中心に主尊として栴檀乾闥婆王を置き、その周囲に十二鳥獣と合掌する三童子をめぐらす。栴檀乾闥婆王は、右手に三叉戟を執り、戟の切先には三童子と十二鳥獣の頭部を差す。左手は胸高に上げて火炎宝珠を捧げ持つ。瑟瑟座上に左脚を踏み下げて座す。護諸童子經は、神咒の力をもって小児の疾病を治す秘法を説き、発病の原因として十五鬼神をあげる。これらの鬼神は種々の動物の形であらわされた。同經を依拠經典とした修法が童子經法で、栴檀乾闥婆王を本尊として、小児の病氣や災厄を除き、また安産を祈るものである。

No.3「観音坐像」は、中央やや下部に主尊の観音坐像を置き、上部に五言四句の偈を刻銘する。この偈は、「請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經」の一節からとったものである。同經は、疫病退散、除病を祈願するものである。

No.4「大黒天立像」は、放射光を放つ日輪の中に、やや右下方を向き、左手に袋の口を持って背負った「日之出大黒天」をあらわす。大黒天は、弁財天および大聖歓喜天(聖天)と関わりがある諸尊の一つである。

② 經典類には、No.5~7「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」、No.8~11「大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品」、No.12~13「大聖歓喜天使咒法經」(ルビ無し)、No.14~15(表)「大聖歓喜天使咒法經」(総ルビ)、No.15(裏)「摩訶般若波羅蜜多心經」、No.16~20「聖天講式」、No.21~22「歓喜天和讃」の 7 種 18 枚がある。

江戸時代の心城院は、弁財天を本尊とするとともに大聖歓喜天(聖天) およびその本地仏である十一面観音を相殿として祀っていた(前掲「寺社書上」)。現在では、大聖歓喜天を本尊に位置づけており、「湯島聖天」として知られている。同寺が「大聖歓喜天使咒法經」・「聖天講式」・「歓喜天和讃」を蔵版するのには、上記を背景とする。なお、「聖天講式」は、跋文によれば文久元年(1861)に薬師寺嘉兵衛・同駒次郎が上木施主となって心城院で開版されたことが知られる。

③ 札類には、No.23「浴油供御牘」、No.24「歓喜天長日華水供之御牘」、No.25「華水供御牘」、No.26「御祈祷浴油供御牘」、No.27「星供御守護」、No.28「御祈祷日供講御守護」、No.29~31「真言」、No.32「真言札」、No.33「立春大吉祥」、No.34「大般若經轉読札」、No.35「奉転読大般若經六百軸福寿増長祈攸」がある。No.23~26 は、歓喜天の修法に関する札である。「真言」のうち、No.29 は十一面観音の真言、No.30~32 は歓喜天の真言である。

④ No.36~52「御圖」は、五言四句の漢詩とその解説文からなり、いわゆる「元三大師御圖」とよばれるものである。第一大吉から第一百凶まで一組揃っている。No.52 裏面には、「文政乙酉九月成」の墨書があり、文政 8 年(1825)の開版が知られ、同年の銘がある御圖筆筭との関連がうかがわれる。本御圖の漢詩の読み方やその解説文は、いわゆる御圖本の一つである『元三大師御圖諸鈔』(文化 6 年(1809)成立)ときわめて近似しており、同書をもとにして作成されたと考えられる。

⑤ その他は 7 種 7 枚である。

No.53「順気湯功能書/順気湯包紙」は、湯島天神男坂下に所在した香具師の松金屋文治郎から頒布された順気

湯という菓の引札の版本である。松金屋文治郎は、京都姉小路の御用香具師鳩居堂の江戸出店であった。

No.54「受領証」は、金額と月日欄が空欄となる受領証の版本である。

No.55「御祈祷巻数」は、歓喜天に関わる修法である浴油供・如法供一七日二十一座で念誦した真言等を証した目録である。願主名・年月日が空白とされており、摺写したものに手書きで願主名・年月日を書き入れたのであろう。

No.56「大浴油祈祷修行案内/題箋「光明供」字体二種」は、「信者講中諸侯」のために執行される大浴油祈祷修行の案内状である。No.57「御供米」は、信者や講中等から心城院の仏前に奉納される御供米に関するもの。No.58「年賀状」とともに、これら3面は近代の制作と考えられる。No.59「無常(和歌)」は、無常と題する和歌である。

御圖筆筒は、現在でも使用されている。各抽斗の内側は仕切りによって三つに区切られ、版本によって摺られた紙製の御圖を抽斗1本につき3番ずつ入れた。「一百」の御圖を入れる左列最下段の抽斗底板上面の銘文によれば、文政8年(1825)6月義山豪栄(天保14年(1843)寂)の代に制作されたものであることがわかる。義山豪栄は、心城院第十世で中興とされる僧で、古希の寿像である「木造義山豪栄坐像」(区指定文化財)が残されている。上述した御圖の版本の墨書銘を踏まえると、義山豪栄の代に同寺で御圖の頒布をするため、文政8年(1825)6月から9月にかけて、必要な諸道具を揃えていったことがうかがわれる。なお、左列最上段の第六番の紙製御圖を入れた抽斗の底板上面には、御圖の紙片が貼り付いて残る。この紙片は、書体からみてNo.36裏面によって摺られた第六番の御圖の残片であると判断される。

#### 《主な参考文献》

- ・菊竹淳一編『仏教版画』(『日本の美術』218号、1984年)
- ・宇津純「元三大師とおみくじ」(宮田登・坂本要編『仏教民俗学大系8 俗信と仏教』名著出版、1992年)
- ・酒井忠夫「中国・日本の籤一特に叡山の元三大師百籤について」(『中国学研究』12号、1993年)
- ・平野恵「本寿寺版本 43面 附. 御圖箱及び御圖竹」(『台東区の文化財保護』第4集、台東区教育委員会、2004年)
- ・大野出『元三大師御圖諸鈔』考(『日本語と日本文学』32号、2007年)
- ・大野出『元三大師御籤本の研究 おみくじを読み解く』(思文閣出版、2009年)
- ・千々石到編『日本の護符文化』(弘文堂、2010年)
- ・内田啓一『日本仏教版画史論考』(法蔵館、2011年)
- ・伊藤宏之「天王寺版本 51面」(『台東区の文化財保護』第7集、台東区教育委員会、2012年)
- ・台東区教育委員会編『天王寺の版本(台東区文化財調査報告書第49集)』(同、2014年)
- ・伊藤宏之「浅草寺版本 158面」(『台東区の文化財保護』第8集、台東区教育委員会、2016年)
- ・真言律宗元興寺編『版本 刻み込まれた信仰世界(平成28年度秋季特別展展示図録)』(公益財団法人元興寺文化財研究所、2016年)
- ・台東区教育委員会編『本寿寺の版本(台東区文化財調査報告書第58集)』(同、2018年)
- ・伊藤宏之「護国院版本 111面 附 印章等 6点」(『台東区の文化財保護』第9集、台東区教育委員会、2019年)
- ・台東区教育委員会編『浅草寺の版本(台東区文化財調査報告書第63集)』(同、2020年)
- ・伊藤宏之「長安寺版本 4面」・「総持院版本 3面」(『台東区の文化財保護』第10集、台東区教育委員会、2022年)
- ・若尾政希「おみくじと御籤本」(岸本寛・曾根原理編『書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷(アジア遊学287)』勉誠社、2023年)
- ・平野多恵『おみくじの歴史 神仏のお告げはなぜ詩歌なのか』(吉川弘文館、2024年)

・大谷弦「童子経の美術—智積院蔵「童子経曼荼羅図」を中心に—」(『京都美術史学』5号、2024年)

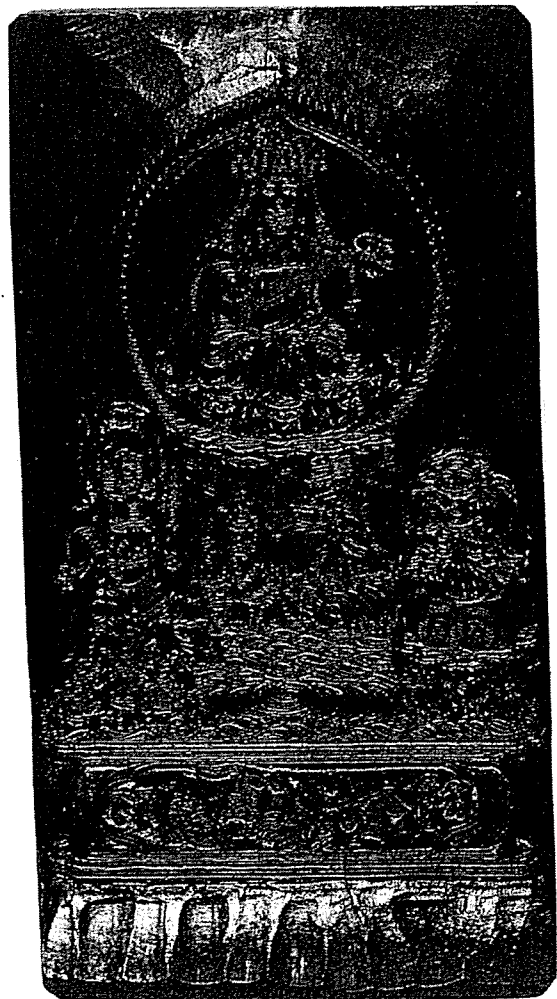
### (12) 文化財的価値

本版本は、心城院が弁財天信仰および歓喜天信仰の寺院であることを背景として、それらの信仰に関連するものが多く、同寺での宗教活動をうかがうことができる。なかでも御圖の版本は、墨書銘によって文政8年(1825)の開版が判明し、同年に制作された御圖筆筒とともに同寺における什物の整備、御圖の頒布といった動向を知ることができる。これらは、心城院の歴史を考える上で重要な資料であるとともに、庶民の信仰および印刷文化の歴史を知る上でも貴重な資料である。

このように、本版本は貴重な文化財であり、指定文化財とすることは妥当であると考えられる。

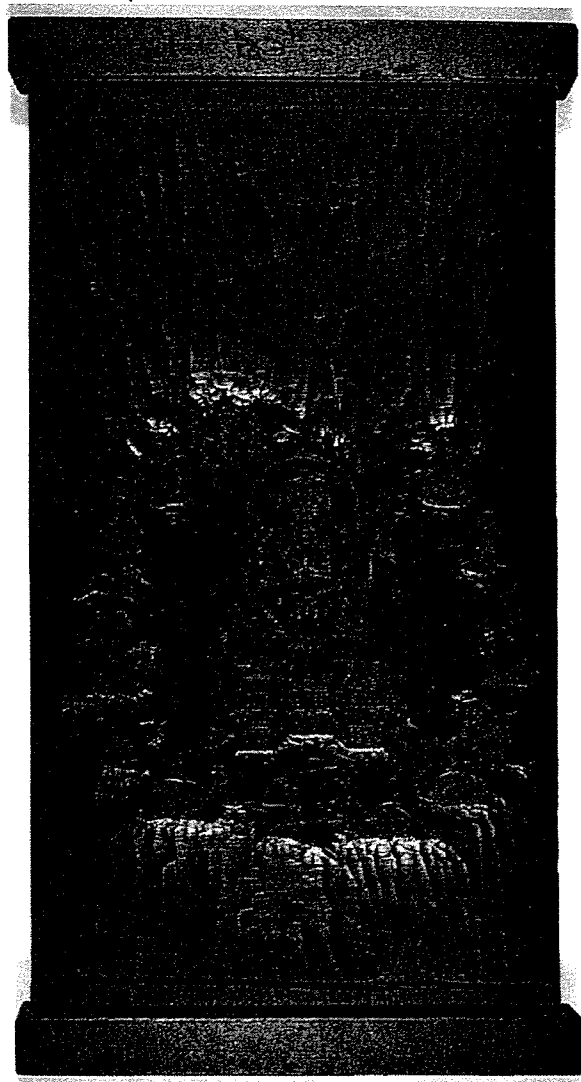
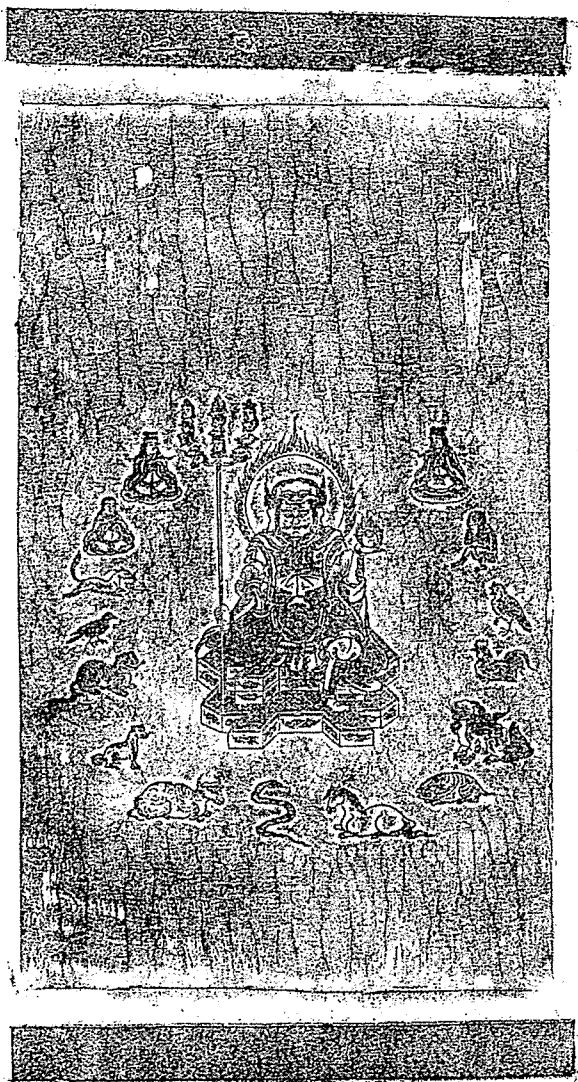
### (13) 指定基準

「文京区文化財指定基準」第一 区指定有形文化財「六 歴史資料」のうち、「(一)政治、経済、社会、文化等歴史上の各分野における重要な事象に関する遺品のうち地域的又は学術的価値の高いもの」に該当する。

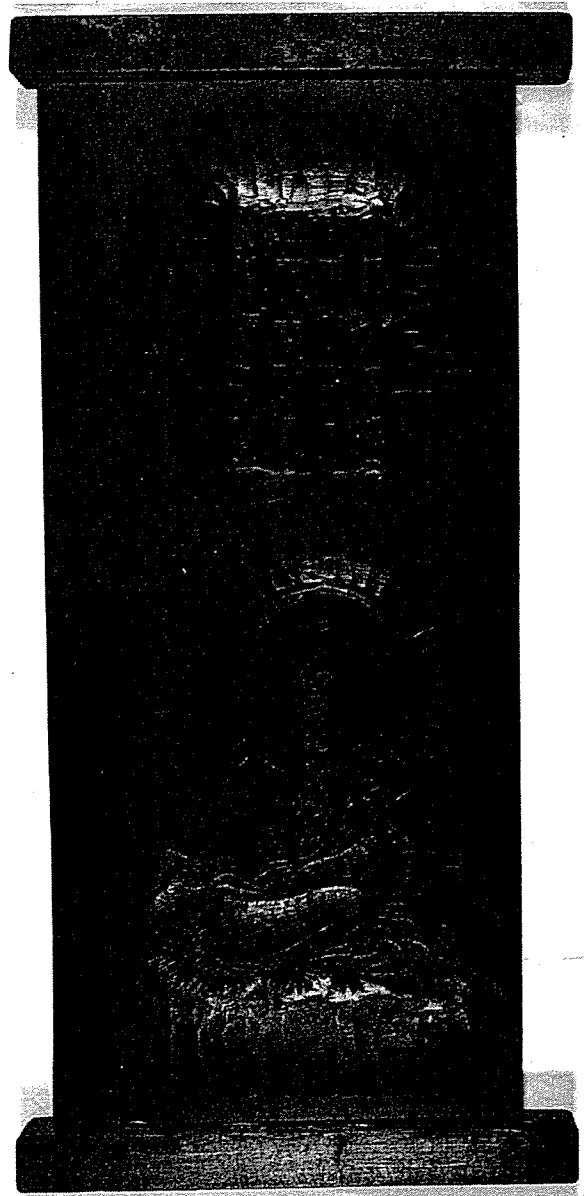


No. 1

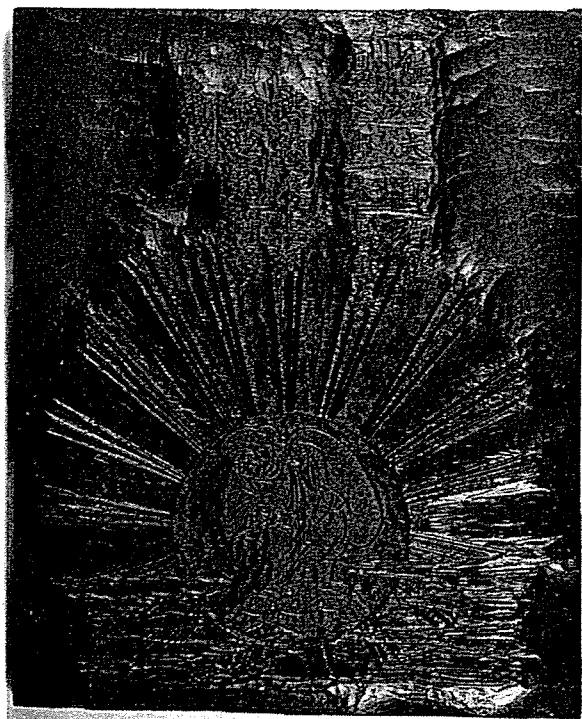
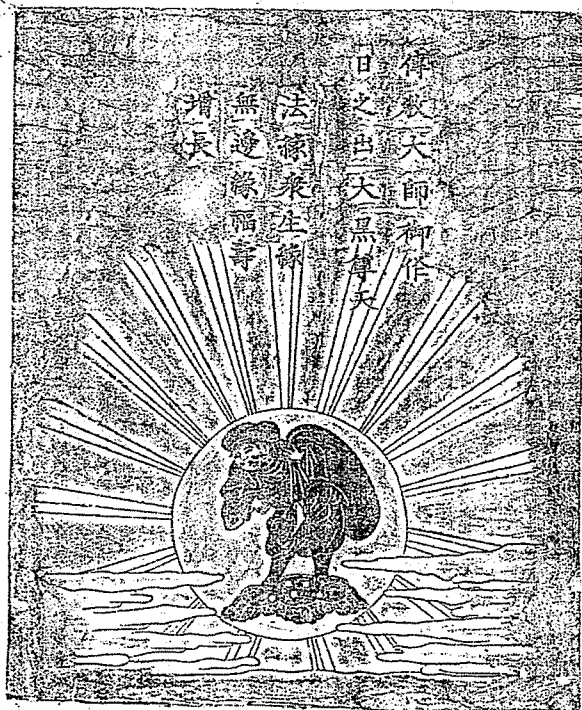
※写真は鏡像反転。(以下同)



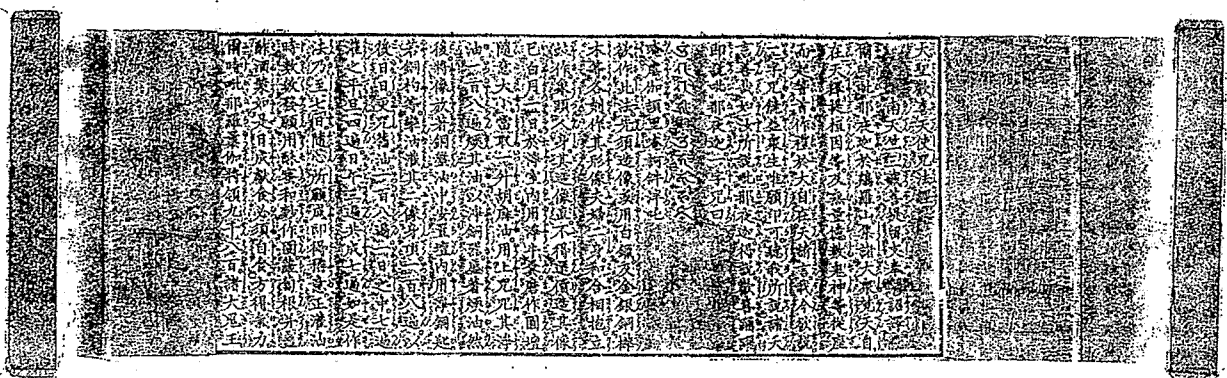
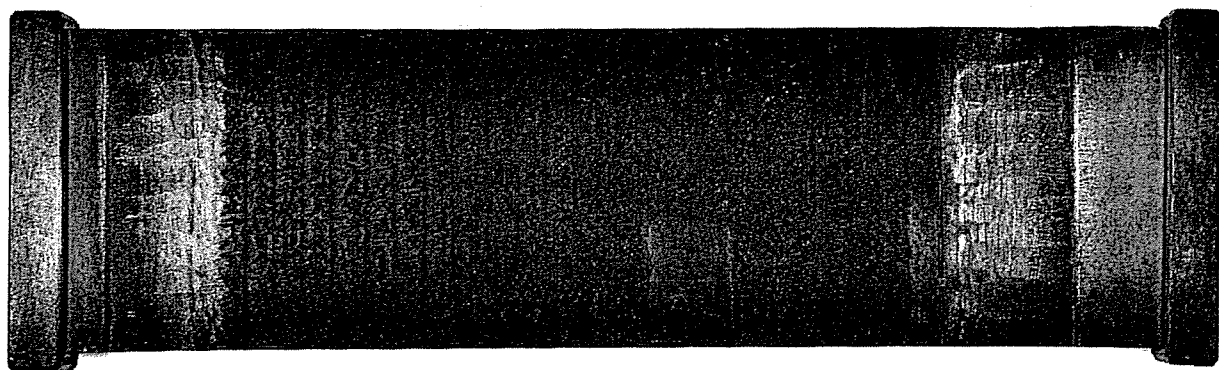
No. 2



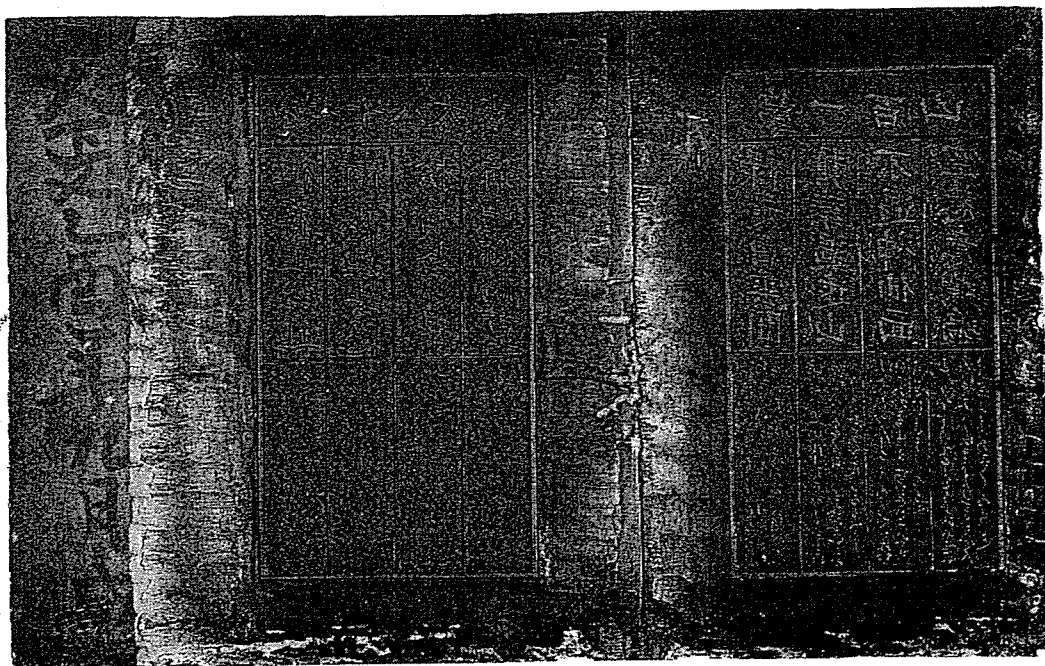
No. 3



No. 4

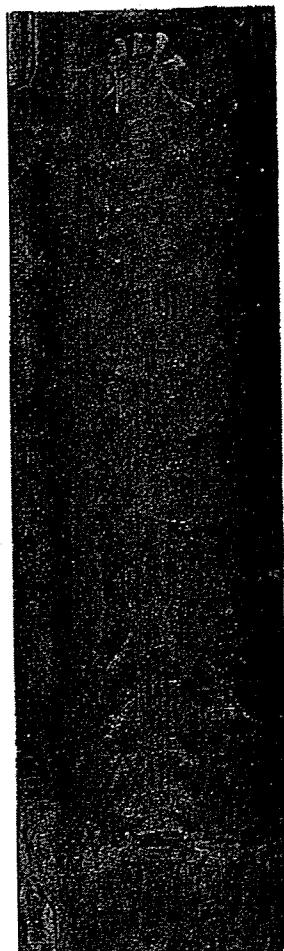


No. 1 4 (表面)

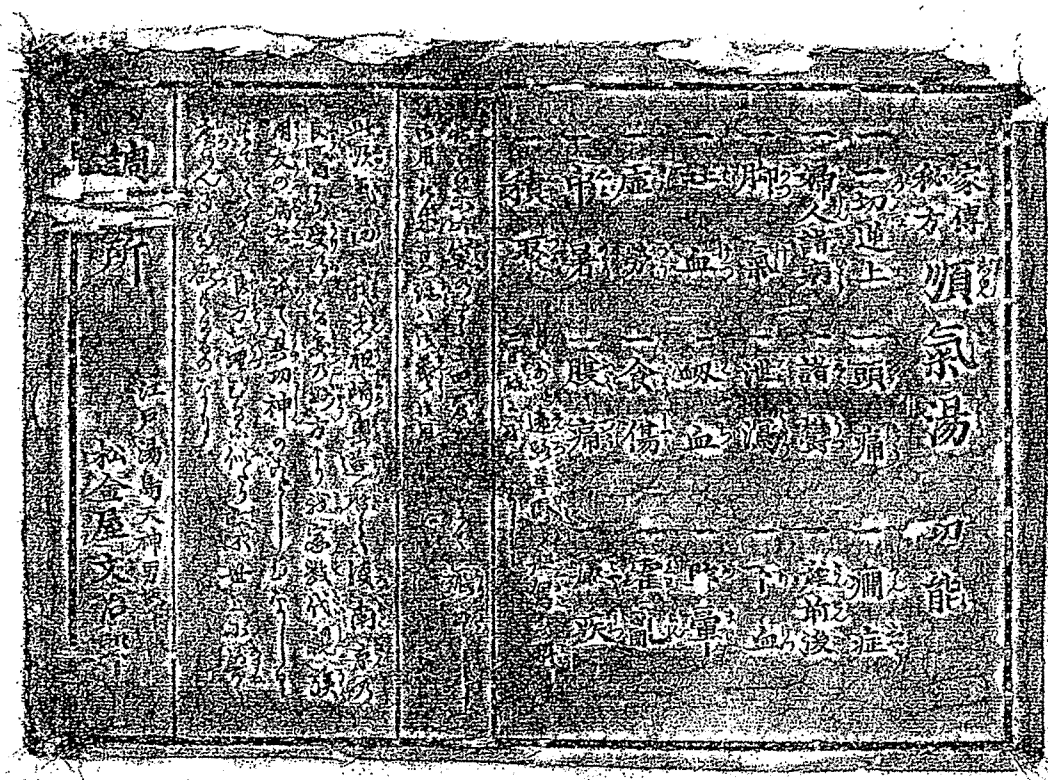
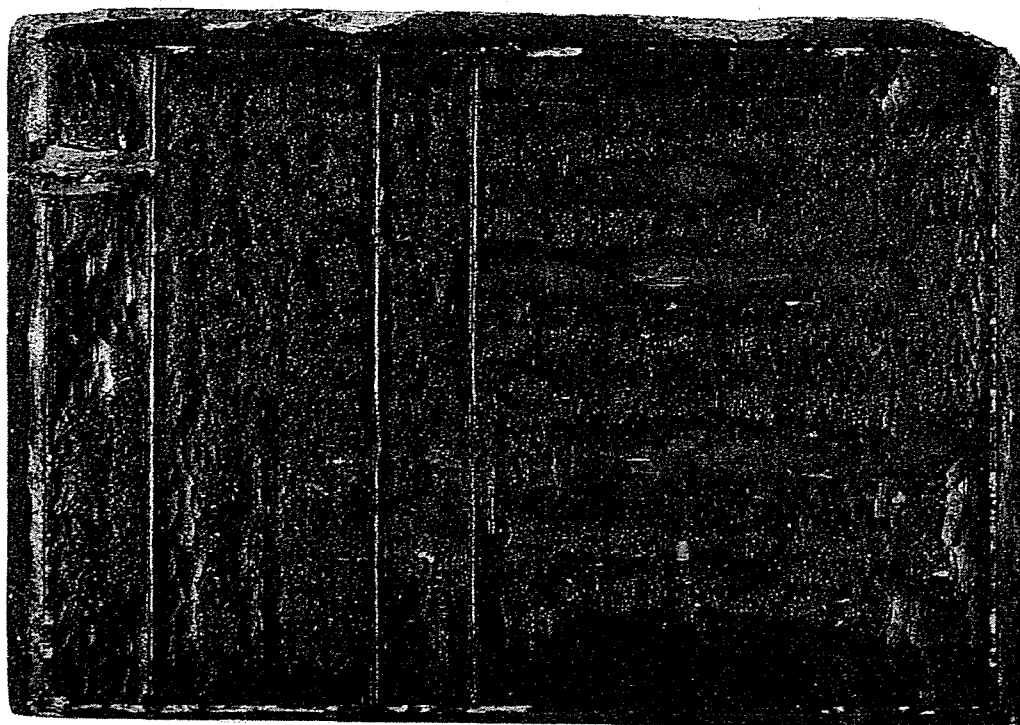


No. 5 2 (裏面)

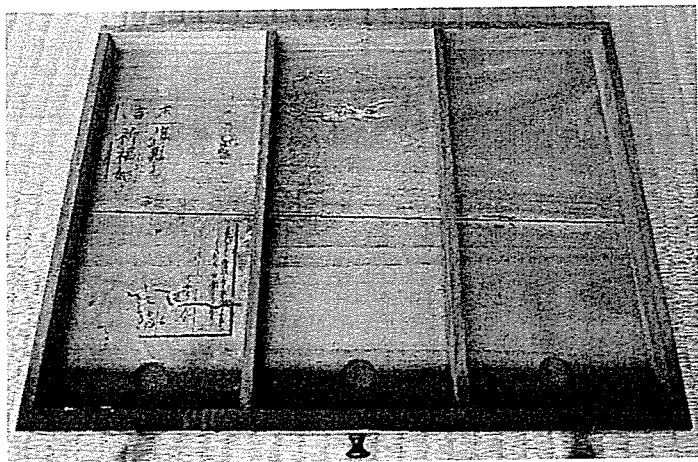
※正対



No. 2 4

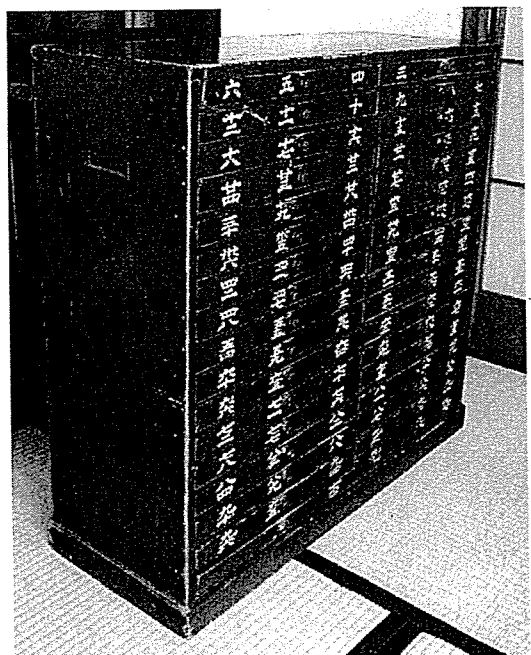


No. 5 3

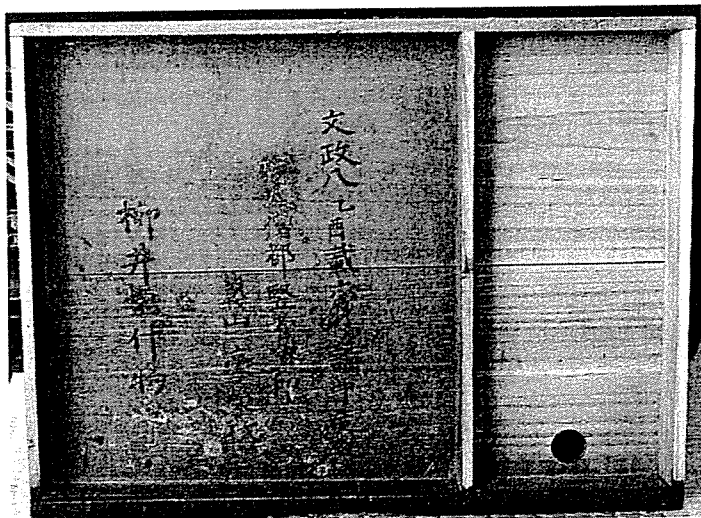


御園筆筒（四番・五番・六番の抽斗）

※六番の御園をいれる場所に紙片が貼り付いている。

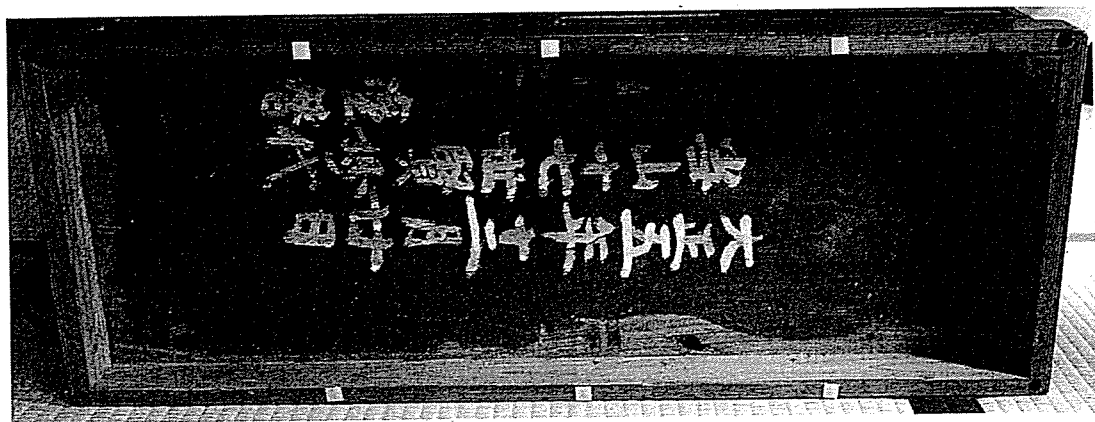


御園筆筒



御園筆筒

（一百番の抽斗の銘文）



御園筆筒（底裏の銘文）

表1 心城院版木一覧

| No. | 分類  | 名称                                                                          | 縦    | 横    | 厚   | 時代             | 銘文                                                    | 備考                                        |
|-----|-----|-----------------------------------------------------------------------------|------|------|-----|----------------|-------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 1   | 仏像類 | 弁財天坐像                                                                       | 17.1 | 8.9  | 4.0 | (江戸時代)         |                                                       |                                           |
| 2   | 仏像類 | 童子経曼荼羅図                                                                     | 42.1 | 24.0 | 2.3 | (江戸時代)         |                                                       | 主尊(乾闥婆)の周<br>囲に十五童子鬼神<br>をめぐらす。           |
| 3   | 仏像類 | 観音坐像                                                                        | 42.5 | 19.2 | 2.5 | (江戸時代)         |                                                       | 端食に一部虫損。                                  |
| 4   | 仏像類 | 大黒天立像                                                                       | 24.9 | 20.4 | 2.0 | (近代)           |                                                       | 「日之出大黒天」の<br>モチーフ。                        |
| 5   | 經典類 | 妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十<br>五／妙法蓮華経観世音菩薩普門品第<br>二十五(二)                              | 16.4 | 50.3 | 2.5 | (近世～近代)        |                                                       | 表裏共一部白黴あ<br>り、墨固まり付着。                     |
| 6   | 經典類 | 妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十<br>五(三)／妙法蓮華経観世音菩薩普門<br>品第二十五(四)                           | 16.5 | 50.2 | 1.9 | (近世～近代)        |                                                       | 裏面は天地逆に刻<br>む。左の端食外れか<br>け。表裏共墨固まり<br>付着。 |
| 7   | 經典類 | 妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十<br>五(五)、題箋「普門品」                                            | 16.6 | 50.2 | 2.2 | (近世～近代)        | 裏面墨書「普門品板<br>木」                                       | 経文と題箋は天地<br>逆に刻む。                         |
| 8   | 經典類 | 大衆金剛不空真実三摩耶経般若波羅<br>蜜多理趣品／大衆金剛不空真実三摩<br>耶経般若波羅蜜多理趣品(二)                      | 15.5 | 49.0 | 2.4 | (近世～近代)        |                                                       | 虫損。左右の端食接<br>着剤で固定。                       |
| 9   | 經典類 | 大衆金剛不空真実三摩耶経般若波羅<br>蜜多理趣品(三)／大衆金剛不空真実<br>三摩耶経般若波羅蜜多理趣品(四)                   | 15.7 | 48.8 | 2.5 | (近世～近代)        |                                                       |                                           |
| 10  | 經典類 | 大衆金剛不空真実三摩耶経般若波羅<br>蜜多理趣品(五)／大衆金剛不空真実<br>三摩耶経般若波羅蜜多理趣品(六)                   | 15.6 | 48.8 | 2.3 | (近世～近代)        |                                                       | 虫損。右の端食下部<br>虫損による欠けあ<br>り。左の端食外れか<br>け。  |
| 11  | 經典類 | 大衆金剛不空真実三摩耶経般若波羅<br>蜜多理趣品(七)／大衆金剛不空真実<br>三摩耶経般若波羅蜜多理趣品(八)、題<br>箋「般若理趣経」字体五種 | 15.3 | 49.5 | 2.4 | (近世～近代)        |                                                       | 左の端食欠失。右の<br>端食虫損・外れか<br>け。下部虫損。          |
| 12  | 經典類 | 大聖歡喜天使咒法経／大聖歡喜天使<br>咒法経(二)                                                  | 15.8 | 48.8 | 2.5 | (近世～近代)        | 右の端食右側面朱<br>書「使 一二」、左の<br>端食左側面朱書「使<br>一二」            |                                           |
| 13  | 經典類 | 大聖歡喜天使咒法経(三)／題箋五種<br>「使咒法経」                                                 | 15.8 | 48.4 | 2.4 | (近世～近代)        | 右の端食右側面朱<br>書「使 三」、左の端<br>食左側面朱書「使<br>三」              |                                           |
| 14  | 經典類 | 大聖歡喜天使咒法経／大聖歡喜天使<br>咒法経(二)                                                  | 14.5 | 48.6 | 2.4 | (近世～近代)        | 右の端食右側面墨<br>書「使咒法経」、左の<br>端食左側面墨書「使<br>咒法経」           | 経文に総ルビ。                                   |
| 15  | 經典類 | 大聖歡喜天使咒法経(三)／摩訶般若<br>波羅蜜多心経、題箋「般若心経」字体五<br>種                                | 14.4 | 48.5 | 2.1 | (近世～近代)        | 右の端食右側面墨<br>書「心経 使咒法<br>経」、左の端食左側<br>面墨書「心経 使咒<br>法経」 | 表面は経文に総ル<br>ビ。裏面左に欠損あ<br>り。               |
| 16  | 經典類 | 聖天講式(次伝供、次法用)(一)／聖天<br>講式(二)                                                | 13.4 | 55.0 | 2.1 | 文久元年<br>(1861) |                                                       | 右の端食外れかけ。                                 |
| 17  | 經典類 | 聖天講式(三)／聖天講式(四)                                                             | 13.4 | 54.6 | 2.2 | 文久元年<br>(1861) |                                                       | 左の端食外れ。                                   |
| 18  | 經典類 | 聖天講式(五)／聖天講式(六)                                                             | 13.3 | 55.5 | 2.3 | 文久元年<br>(1861) |                                                       | 左の端食欠損。裏面<br>は天地逆に刻む。                     |
| 19  | 經典類 | 聖天講式(七)／聖天講式(八)                                                             | 13.2 | 54.7 | 2.0 | 文久元年<br>(1861) |                                                       | 表面上部中央に割<br>れあり。上部虫損1<br>ヶ所あり。            |
| 20  | 經典類 | 聖天講式(九)／聖天講式(十)、題箋<br>「大聖歡喜天講式」字体二種                                         | 13.5 | 55.4 | 1.8 | 文久元年<br>(1861) | 裏面刻銘「上木施主<br>薬師寺嘉兵衛・同<br>駒次郎」                         | 右の端食欠損。裏面<br>に題箋と思われる刻<br>銘あり。            |
| 21  | 經典類 | 歡喜天和讃／歡喜天和讃(二)                                                              | 15.5 | 48.6 | 2.5 | (近世～近代)        | 右の端食脇朱書「和<br>一二」、左の端食脇<br>朱書「和一二」                     | 左の端食下部虫損。                                 |
| 22  | 經典類 | 歡喜天和讃(三)／歡喜天和讃(四)、題<br>箋二種「歡喜天和讃」                                           | 15.5 | 48.3 | 2.4 | (近世～近代)        | 右の端食脇朱書「和<br>三四」、左の端食脇<br>朱書「和三四」                     | 左の端食下部虫損。                                 |
| 23  | 札類  | 浴油供御牘                                                                       | 46.9 | 13.5 | 2.7 | (江戸時代)         |                                                       |                                           |

|    |     |                         |      |      |     |                           |                                  |                          |
|----|-----|-------------------------|------|------|-----|---------------------------|----------------------------------|--------------------------|
| 24 | 札類  | 歓喜天長日華水供之御牘             | 47.0 | 13.6 | 2.5 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 25 | 札類  | 華水供御牘                   | 13.3 | 4.2  | 3.3 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 26 | 札類  | 御祈祷浴油供牘                 | 13.3 | 4.1  | 2.4 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 27 | 札類  | 星供御守護                   | 10.7 | 4.9  | 2.7 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 28 | 札類  | 御祈祷日供講御守護               | 9.8  | 3.8  | 2.3 | (近世～近代)                   | 裏面墨書「日供」                         |                          |
| 29 | 札類  | 真言                      | 11.5 | 2.9  | 3.6 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 30 | 札類  | 真言                      | 11.4 | 3.3  | 3.7 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 31 | 札類  | 真言                      | 11.5 | 3.3  | 3.7 | (江戸時代)                    |                                  |                          |
| 32 | 札類  | 真言札                     | 17.0 | 7.6  | 2.5 | 大正6年(1917)<br>4月          | 裏面墨書「大正六年<br>四月吉日／湯島聖<br>天堂／醍醐代」 |                          |
| 33 | 札類  | 立春大吉祥                   | 29.4 | 5.5  | 1.3 | 昭和28年<br>(1953)12月20<br>日 | 裏面墨書「昭和廿八<br>年十二月廿日 心城<br>院」     |                          |
| 34 | 札類  | 大般若経転読札                 | 30.7 | 9.1  | 1.8 | (近代)                      |                                  |                          |
| 35 | 札類  | 奉転読大般若経六百軸福寿増長祈攸        | 15.9 | 4.0  | 1.7 | (近代)                      | 裏面墨書「本郷湯島<br>心城院／チクマン」           |                          |
| 36 | 御圍  | 御圍(一～三)／御圍(四～六)         | 21.5 | 34.6 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 37 | 御圍  | 御圍(七～九)／御圍(十～十二)        | 21.8 | 34.7 | 1.8 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 38 | 御圍  | 御圍(十三～十五)／御圍(十六～十八)     | 21.7 | 34.9 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 39 | 御圍  | 御圍(十九～二十一)／御圍(二十二～二十四)  | 21.7 | 34.8 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 40 | 御圍  | 御圍(二十五～二十七)／御圍(二十八～三十)  | 21.2 | 34.7 | 2.0 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 41 | 御圍  | 御圍(三十一～三十三)／御圍(三十四～三十六) | 21.8 | 34.8 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 42 | 御圍  | 御圍(三十七～三十九)／御圍(四十～四十二)  | 21.4 | 34.8 | 2.2 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  |                          |
| 43 | 御圍  | 御圍(四十三～四十五)／御圍(四十六～四十八) | 21.5 | 34.7 | 2.2 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 裏面下部割れ。虫損。               |
| 44 | 御圍  | 御圍(四十九～五十一)／御圍(五十二～五十四) | 21.5 | 34.7 | 2.3 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 下部虫損。                    |
| 45 | 御圍  | 御圍(五十五～五十七)／御圍(五十八～六十)  | 21.6 | 34.8 | 1.8 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 下部虫損。                    |
| 46 | 御圍  | 御圍(六十一～六十三)／御圍(六十四～六十六) | 21.2 | 35.0 | 1.8 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 上部左上破損。下部虫損甚。            |
| 47 | 御圍  | 御圍(六十七～六十九)／御圍(七十～七十二)  | 21.2 | 34.8 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 下部虫損甚。                   |
| 48 | 御圍  | 御圍(七十三～七十五)／御圍(七十六～七十八) | 21.8 | 34.1 | 2.8 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 下部破損。虫損甚。御圍(七十八)一行分割り抹消。 |
| 49 | 御圍  | 御圍(七十九～八十一)／御圍(八十二～八十四) | 21.6 | 34.4 | 2.1 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 裏面見当端虫損による割れあり。          |
| 50 | 御圍  | 御圍(八十五～八十七)／御圍(八十八～九十)  | 21.6 | 34.7 | 1.8 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 表面見当破損。虫損。               |
| 51 | 御圍  | 御圍(九十一～九十三)／御圍(九十四～九十六) | 21.1 | 34.8 | 1.9 | 文政8年(1825)<br>9月          |                                  | 下部破損。虫損甚。                |
| 52 | 御圍  | 御圍(九十七～九十九)／御圍(一百、七十八)  | 21.8 | 34.6 | 2.2 | 文政8年(1825)<br>9月          | 裏面墨書「文政乙酉<br>年九月成」               | 下部破損甚。虫損。                |
| 53 | その他 | 順気湯功能書／順気湯包紙            | 16.8 | 24.1 | 2.3 | (江戸時代)                    |                                  | 虫損甚。                     |
| 54 | その他 | 受領証                     | 22.5 | 12.3 | 1.4 | (近世～近代)                   |                                  | 反り。                      |
| 55 | その他 | 御祈祷巻数                   | 15.1 | 38.3 | 2.8 | (近代)                      |                                  | 別材として見当を右下と下に付ける。        |
| 56 | その他 | 大浴油供祈祷修行案内／題箋「光明供」字体二種  | 15.4 | 8.9  | 1.6 | (近代)                      |                                  |                          |
| 57 | その他 | 御供米                     | 24.2 | 12.1 | 2.2 | (近代)                      |                                  |                          |
| 58 | その他 | 年賀状                     | 15.2 | 8.8  | 1.9 | (近代)                      |                                  |                          |
| 59 | その他 | 無常(和歌)                  | 24.0 | 7.8  | 2.7 | (近代力)                     |                                  |                          |

(注1) 名称について、表面・裏面の両面ある場合は、「／」で区切り、前者は表面、後者は裏面をあらわす。

(注2) 大きさの単位は、センチメートル。また、端食を除いた版面の大きさをあらわす。

(注3) 時代の括弧書きは、西暦あるいは推定の時代をあらわす。

有功德咒 二千百遍  
奉法施

普門品 三十三卷  
大隨求 三十三卷  
金剛經 三十三卷

右一七箇日抽丹誠旨趣者願主

心願成就家運繁榮福壽增益諸災消除  
如意滿足祈攸蓋如件

年月日

大阿闍梨沙門 敬百

No. 56 大浴油供祈禱修行案内／題箋「光明供」字体二種

(表)

謹啓貴家益々御清祥之段奉欣賀候

陳者例年の通り本月ハ特ニ信者講中諸侯の爲め

大浴油供御祈禱修行共ニ来る十六日ハ午前十時より

法話致次ニ大般若經轉仕候間当日ハ萬障御

操合せ御有志の御方々御同伴にて御参拝相成

度此段右御案内申上候也

月日 本郷湯島天神町

心城院

(裏)

光明供

光明供

No. 57 御供米

歡喜天

御供米

湯寫

心城院

No. 58 年賀状

恭賀新年

併せて高堂の萬福を祈り

尚倍舊の御厚情を希上候

一月元旦 本郷湯島天神町

心城院

No. 59 無常(和歌)

無常

人の身は露よりもろき物そかし  
きへてかえる子は仏なり

味法

文政乙酉年九月成

No. 53 順氣湯功能書／順氣湯包紙

(表)  
家傳 秘方 順氣湯 功能  
一切逆上 一頭痛 一癰症  
婦人諸病 一諸鬱 一產前後  
脚氣 一泄瀉 一眩暈  
吐血 一衄血 一霍亂  
虛勞 一食傷 一雀目  
中暑 一腹痛 一虛疾  
一積聚 其外遠路草臥 船口及醉  
二日酔に用「」し

右之案此袋のまゝ三四度「」にて振出し  
御用被成其跡は御養御用「」

此順氣湯は我先祖崎口造曆し頃南京の  
良醫より受請□□の妙方より我家数代親族  
朋友の病者に試て其功神の□□なしく  
もて「」良方を埋むるに似たり故に世上に普く  
廣めん事を欲するものなり

江戸湯島天神男坂下

調所

松金屋文治郎

(裏)

家傳

秘方

順氣湯

No. 54 受領証

記

一 右正二受納仕候也

湯島天神男坂下

月 日 柳井堂

No. 55 御祈禱卷數

御祈禱卷數

(梵字) 奉修大聖歡喜天 浴油供 一七箇日廿有二座攸

奉念誦

|        |      |
|--------|------|
| 大日如来真言 | 二千百遍 |
| 佛眼部母真言 | 二千百遍 |
| 一字金輪真言 | 二千百遍 |
| 十一面尊真言 | 二千百遍 |
| 軍荼利明王咒 | 二千百遍 |
| 歡喜天大身咒 | 二千百遍 |
| 同心咒    | 二萬千遍 |
| 同心中心咒  | 二千百遍 |
| 大自在天大咒 | 二千百遍 |
| 天悅咒    | 二千百遍 |
| 悅典咒    | 二千百遍 |
| 肝心咒    | 二千百遍 |
| 謂和咒    | 二千百遍 |
| 吉祥咒    | 二千百遍 |
| 佛慈護咒   | 二千百遍 |

④ 白<sup>はく</sup>雲<sup>うん</sup>帰<sup>へり</sup>去<sup>さる</sup>路<sup>みち</sup>【なにこともむなしくはかなきていなり雲のゆきゝは  
さためなきものなればはかなきたとへ也】

⑤ 不<sup>す</sup>見<sup>み</sup>月<sup>げつ</sup>波<sup>は</sup>澄<sup>すめる</sup>【きりふかくして月の見へねばせめて水にうつるか  
げなりとも見んとおもへば波あらゝそれさへ見へぬ也】

① 第九十八凶

② 欲<sup>ほつ</sup>理<sup>り</sup>新<sup>おとめんと</sup>絲<sup>し</sup>亂<sup>みだれを</sup>【いとのみだれをおさめんとするはしんくな  
るものなりこれはおもひのむすほれしをたとふ】

③ 閑<sup>かん</sup>愁<sup>しうれり</sup>足<sup>せひ</sup>是<sup>こ</sup>非<sup>ひ</sup>【しつかにゐてうれひにしづみぜひをわきまへかねたる  
ていなり】

④ 只<sup>ただ</sup>困<sup>く</sup>羅<sup>ら</sup>網<sup>もう</sup>裡<sup>に</sup>【らまうといふはあみのこと也あみにかゝりたる魚  
のごとくくるしみあるとなり】

⑤ 相<sup>あひ</sup>見<sup>み</sup>幾<sup>いく</sup>人<sup>ひと</sup>悲<sup>かなしみ</sup>【いくばくかたにんのかなしみを我かなしみに  
引くらべ物おもひたへましきなり】

① 第九十九大吉

② 紅<sup>こう</sup>日<sup>じつ</sup>當<sup>あたつて</sup>門<sup>もん</sup>照<sup>て</sup>【こうじつとはよくてりかゝやく日なり門にあたつ  
てとは天道よりめぐみをうくる事也】

③ 暗<sup>あん</sup>月<sup>げつ</sup>再<sup>また</sup>重<sup>おもひ</sup>圓<sup>まん</sup>【あんげつはくらき月ふたゝびてりわたりてちよう  
ゑんとまどかになるなり】

④ 遇<sup>あひて</sup>珎<sup>ちんにすべからず</sup>須<sup>う</sup>得<sup>たからを</sup>實<sup>じつ</sup>【ちんはめぐらしとよむこれは何ことにもあれ  
めづらしきことにあひてたからを得べしと也】

⑤ 頗<sup>すこ</sup>有<sup>あ</sup>稱<sup>めい</sup>必<sup>かならず</sup>造<sup>さ</sup>【すこふるとはよほとゝいふこと也しやうありと  
は名をあぐるなりこれは大人に引立られよほど名をあぐへしといふこと

也となり】

(No. 2 裏)

① 第七十八大吉

② 但<sup>ただ</sup>存<sup>ぞんず</sup>正<sup>ただしき</sup>公<sup>こう</sup>道<sup>どう</sup>【おほやけのたゞしきみちをまもりそんじてといふ  
事也】

③ 何<sup>なん</sup>愁<sup>しうれり</sup>理<sup>り</sup>去<sup>さる</sup>忠<sup>ちゅう</sup>【りをたてかんけんなどしてきにさかひかへつてふ  
ちうとよばるともうれへまし】

④ 松<sup>せう</sup>栢<sup>はく</sup>蒼<sup>そう</sup>々<sup>々</sup>翠<sup>すい</sup>【まつかしはなどのいろもかはらすいつもみとりなる  
ことく心をたゞしくもつへしと也】

⑤ 前<sup>ぜん</sup>山<sup>ざん</sup>緑<sup>りく</sup>馬<sup>ば</sup>重<sup>かさなる</sup>【きみのきにたかふともついにまことのちうきあらはれ  
さかゆべしと也】

① 第一百凶

② 祿<sup>ろく</sup>走<sup>はし</sup>白<sup>はく</sup>雲<sup>うん</sup>間<sup>ま</sup>【ちきやうざいほうもむなしくなり行ていなり白  
うんのあいだとはつかまへ所のなきたとへなり】

③ 携<sup>たづさへて</sup>琴<sup>きん</sup>過<sup>をすぐ</sup>遠<sup>えん</sup>山<sup>ざん</sup>【此心は世の中おもはしからぬ故いんとんする  
こゝろ也又琴をたつさふは知音を求るなるべし】

④ 不<sup>ずんば</sup>遇<sup>あは</sup>三<sup>さん</sup>神<sup>しん</sup>仙<sup>せん</sup>面<sup>めん</sup>【たとひいんじやとなりても神仙又知音にもあは  
ねばこれもまたむたことゝなる也】

⑤ 空<sup>むなしくひいて</sup>惹<sup>ひいて</sup>意<sup>い</sup>爛<sup>らん</sup>編<sup>へん</sup>【するほどの事よからぬゆへに心もみだれまよひ  
てらんはんとまだらのごとくなりしと也】

【墨書】

を居は忽ち死すべし人の身にとりては至ごくこんきうの躰なり】

③踊躍入二波一濤一【かんちの魚おどつて波に入がごとく人も今迄こんきう難義せしにこれを転じて仕合よくなるとなり】

④隔中須有レ望【万事ねかひのぞむことある中に少しへだてさわりあるべしといふことなり】

⑤先且慮二塵一勞一【まづしばらく見合すべし其うちにはさわりもとけて心やすくなるべしとなり】

※第一句の解説は、第二句の解説欄にはみ出る。

(No. 5 裏)

①第九十四半吉

②事忌樽前語【酒のうへにてことを仕出しあやまつ事あるべしつゝしみてよし又樽尊同音なれば尊前とも通すべし此時には貴人の前をつゝしむべし】

③人防二小輩一交一【せうはいのまじはりとは我より下さまとのまじはり也これをもつゝしまざればわざはひおこるべし】

④幸乞二陰一公祐一【いんこうとは我主人のおくがた或はおばあね又は出家などのたすけを得てぶなんなるべしと也】

⑤方免レ事敲レ文【するぐは物のやかましきことものがれて心やすくなるべしと也文をたゝかんとはまじはりをよくするをいふなり】

①第九十五吉

②志氣勤修レ業【こゝろざしにゆだんなくして我家業をつとめしゆるるなり】

③禄位未レ造一逢【されどもいまた其功あらはれざる故禄をも得ずくらるにもすゝまざるなり】

④若聞二金一難語【きんけいのごとはあかつきにはとりの声なりこれはしせつの到来をまつて見よといふことなり】

⑤乗レ船得二便風一【しせつ至らはじゅんふうに舟を出すがごとく心のまゝに仕合あるべしとなり】

①第九十六大吉

②雞逐レ鳳同飛【此心はいやしき人も貴人又は賢人の所作ふるまひをまねびならふ事をたとへたり】

③高林整二羽一儀【たかきはやしにとまり羽つくるひするていはほうわうにもおとらぬやうすなりこれ前にいふいやしき人もけん人のごとくになるを云】

④棹レ舟須レ濟レ岸【ふねにさほさしてきしにわたるとは心やすらかに世をわたることにとたとへたり】

⑤寶貨満レ船帰【ほうくわはたから物の事なりふねにみつるほどたからを得てかへるべしといふこと也】

(No. 5 表)

①第九十七凶

②霧罍二重樓屋一【きりはもうろうとくらぐ二かい作の家をおほといふこと也是は世間のふさがりたるにも心のくもるにも云】

③佳人水一上行【或大切におもふ人が水のうへを行ごとくするほどの事あやふくこゝろもとなし】

もの思ひをするていをいふなり」

① 第八十九大吉

② 一片無瑕玉【少しも疵なき玉なりされどもいまだみがゝざるあら玉なるべしこれは智ある人のたとへなり】

③ 從今好二琢一磨【たくまといふは玉をみがくこと也いかなる玉もみがゝぬさきは石に同これをみがきてひかりをあらはす也人のうへならば学文をして智をみかく也】

④ 得遇二高人識【此玉もしる人なければ石瓦も同前也高人とはよくめきゝする人也此人にあふて玉の徳もあらはるゝをいふなり人のうへにも御上より御見出しに預ること也】

⑤ 方逢二喜氣一多【玉のひかりのあらはるゝごとく人もりつしん出世してよろこびにあふ事多しとなり】

① 第九十大吉

② 一信向レ天飛【たゞ一へんに信力あらば其まことの心天につうじとぶがごとくなるべしとなり】

③ 秦川舟自 帰【しんせんしんせんの舟にはあやにしきをつむといふ故事ありしからば天のさいはひを得て此舟に宝をつみてかへる心あり】

④ 前途成二好事一【行すへなすほどのことみな吉事なるべしと也好事とはよきこととよむなり】

⑤ 應得二貴人推一【貴人高位の人にめをかけられ仕合とふまゝなるべし推とは力をそえらるゝことなり】

(No. 1 表)

① 第九十一吉

② 改二變前途一去【前かどのあしき事もあらたまりかはりてこれより次第によくなるべし】

③ 月桂又逢レ圓【月のかけたるもぜんぐ満月となるごとくひとまたんぐと満足すべしとなり】

④ 雲中 乘レ禄至【天道より知行財宝をあたまひて福祿ゆたか成べしという事也】

⑤ 凡事可レ宜レ先【はんじとはすべての事とよむ何事をなすにも人にさきだつてするかよろしといふ事也】

① 第九十二吉

② 自レ 幼 常為レ旅【此句のこころは人の身のうへ何事もさだまらずおちつかぬ事をいふなり】

③ 逢レ春駿一馬驕【馬は陽氣の物にて春になればおこりいさむもの也これは人も仕合よくいさむ事にたとふ】

④ 前程宜レ進レ歩【行すへよきほどにいさんであゆみをすすむべしといふ事なり】

⑤ 得三箭降二青一霄【箭はまつすぐにしてあたるもの也あたるときはすなはち得るなりこれ天より吉事を得るの手すじをあたへ給ふことをいふ也】

① 第九十三吉

② 有レ魚臨二旱一地一【かんちとは水なくかはきたる土地也此かんちに魚

⑤財寶鬼來偷【きといふは俗にいふひんほう神のたくひ也金銀さいほうはこの鬼が来つてぬすみさると也】

(No. 5 表)

①第八十五大吉

②望用何愁晩【のそみ事がおそきとて何もあんしうれふるまじきとなり】

③求名漸得寧【やうやくとはしだい／＼にと云こと也なをあげんとおもへは是よりしだい／＼にやすき事を得べし】

④雲梯終有望【うんてい／＼のぞみ】  
【うんていとくものかけはしなりこれは出世の手が／＼をいふつひによき手が／＼も出来るべし】

⑤歸路入蓬瀛【ほうえいととは仙人の住たからの山なりかへりみちに此山に入て仙人となりつねにたのしむべしと也】

①第八十六大吉

②花發應陽臺【やうたいとは花見のためにつくりたるうてな花の見事に咲るとやうたいのけつかうなると相応するなり】

③車行進寶財【かず／＼のたからものを車につみてすゝみ行けしき也】

④執文朝二帝殿【文をとつてとは文武の才智によつてみかどへ召出さる也てうすとは出勤する事なり】

⑤走馬听聲雷【らいはいかづち也此心は馬をはしらしめて日々出勤するあせいのさかんなる事いかづちのと／＼ろくがことく人みなおそれふくする也】

※第一句の解説は、第二句の解説欄にはみ出る。

①第八十七大吉

②鑿石方逢玉【「石に□□□れて有ものなればそれ□□得んため石をほりうがつ也人の「万望事あるに心をうがつ」「功をつまはじやうじゆすべきなり】

③淘沙始見金【此句の／＼も前におなじ玉を金といひかへたるばかりにて同じ／＼なり】

④青霄終有路【せいせうは青雲といふに同じ青雲とは官にすゝむこと也又上つ方にまじは□を青雲のまじはりともいふ也□□ありとは手すじを得る】

⑤只恐不堅心【これほどの人なれとも心ざしかたからすあやまちを引出さん□しれがたしおそれつゝしむべしと也】

※第一句の解説は、第二句の解説欄にはみ出る。

(No. 5 裏)

①第八十八凶

②作事不和同【わどうせずとは和合せずといふに同じ何ことをしても人が思ひあはずとなり】

③臨危更主凶【さらにといふはそのうへにといふ／＼も也わざはひのかさなりて来るやうすなり】

④佳人生苦根【かじんといふは我たよりとおもふ人をいふ也此人にくるしみの根本しやうずると也】

⑤閑慮兩三重【物事おもふやうにならぬ故いくたびもくりかへし／＼】

人々内心にまことをつくすへきたとへなり】

③忠正帝王宣【道德忠誠の功あらはれ天子の宣旨下りあつくもちゐらるへきなり】

④鳳逐レ鸞飛去【らんほうとともに吉するの鳥なれば彼出世のずゐさうあらはるるなり】

⑤昇レ高過二九一【九天の高きにのほるものはらんとほうと也彼忠せいの人もちゐられ高位のぼるをたとへていふ】

①第八十一小吉

②道一合 須ニ成合一【仁義五常の道に合ひたらは万望のことじやうじゆすべしとなり】

③先憂事 更多【さきにうれひことありしも是より吉事にかわるへしと也但し是は道にかなふ人のこと也】

④所レ求財寶盛【さいほうもさかんにして思ふまゝになるべし是も無理非道ならば叶ひがたし】

⑤更一變得二中和一【ふたゝびへんじて一家一門も和順にて中和の徳に叶へし皆道に叶ふか故なり】

(No. 49 裏)

①第八十二凶

②火發應レ連二天一【火はつして天につら成とは炎のかたちなり又火はしんとていかりはらだつことにぞくする也いかさま大なるわざはひにあふへしと也】

③新愁惹二舊一【あたらしきうれひにふるきあやまちとまじりて身もよ

もあらぬさまなり】

④欲レ求二千里外一【とをき国へゆきてこのさいなんをのかれさけんとおもへともといふことなり】

⑤要レ渡 更無レ船【わたりをもとむるにふねなくしやうもやうもなきていなり】

①第八十三凶

②舉レ歩出二雲端一【あしをあげてくものはしに出るといふ事也これおよはぬことのたとへをいふなり】

③高枝末可レ攀【たかきえたへよぢのほらんとすれどもほられすこれもおなじたとへなり】

④昇レ頭 看二皎月一【かうべをあげてあきらか成月をみればといふ心はおよばぬ望に心をつくしゐる也月を望事】

⑤猶在二黑雲間一【我望む所の月はなをくろくものあひたに有これみなそのみの叶わぬことをたとへていふなり】

①第八十四凶

②否極方無レ泰【ひこくとはよからぬ事のきはまりといふこと也ゆるに何事をしても中々やすきことはなしと也】

③花開 値二晩秋一【ばんしうはくれのあきとよむ九月のこと也此ころに花のひらけたりともやがて霜雪にあふてかれしほみ何の悪きもなき事なり】

④人情不ニ調備一【にんじやうずてうひせすとは中々人のおもひつきもあるましと也とかく人氣の和合せぬをいふ】

(No. 8 裏)

①第七十六吉

②富貴天之祐 【富貴は天よりさつけ給ふ所なれを我智恵さいかく斗りにては得られぬなり】

③何須<sup>なんふ</sup>苦<sup>くる</sup>レ用<sup>もち</sup>レ心<sup>こころ</sup> 【いかほともかきくるしんで心をつくすとも益なし天めいのなす所なればなり】

④前程<sup>ぜんてい</sup>應<sup>おほ</sup>レ顯<sup>あらは</sup>レ跡<sup>あと</sup> 【行すへの吉凶はみなまへになし置たる善惡の跡のあらはるゝにて自業自得なり】

⑤久<sup>ひさしく</sup>用<sup>もち</sup>得<sup>あ</sup>二高臨<sup>かうりん</sup>一 【久しく心を用ゐて善をつまば其徳にて高位にのほることを得へしとなり】

①第七十七凶

②累<sup>る</sup>滞<sup>たい</sup>未<sup>まだ</sup>能<sup>あた</sup>レ

③求<sup>もと</sup>レ名<sup>な</sup>莫<sup>な</sup>二遠<sup>とほく</sup>一 圖<sup>はかること</sup> 【とをくはかることなかれといふはすへの末に

④登<sup>のぼ</sup>レ舟<sup>ふね</sup>波<sup>は</sup>浪<sup>なみ</sup>急<sup>いそ</sup> 【舟にのらんとすれはなみかぜあらしこれは世わたり

⑤咫<sup>し</sup>一尺<sup>せき</sup>隔<sup>へん</sup>二天<sup>てん</sup>衢<sup>く</sup>一 【しせきとは寸尺といふに同じてんくとは天地のこと

也これはわつかに尺寸のまちかひがするゑには天地をへたつるほとんちが

ひに成へしと也】

①第<sup>ち</sup>□十八大吉

②(第一句と解説削除)

③何愁<sup>なんしゅう</sup>理<sup>り</sup>去<sup>き</sup>忠<sup>ちゅう</sup> 【あるひ】 「ん言などして氣にさかひかへつて不忠とよばるともうれへまじと也】

④松栢<sup>しょうはく</sup>蒼<sup>そう</sup>々<sup>々</sup>翠<sup>すい</sup> 【松栢などの霜にいたますにいつもみとりなることく心のみさは正しくもつへしとなり】

⑤前<sup>まへ</sup>山<sup>さん</sup>祿<sup>りく</sup>馬<sup>ま</sup>重<sup>じゅう</sup> 【いつたんは君の氣にたかふこと有とも終にまことの忠義あらはれさかゆへしとなり】

※第一句分が完全に削られて削除されているほか、全体的に摩滅が激しい。

(No. 9 表)

①第七十九吉

②残<sup>ざん</sup>月<sup>げつ</sup>未<sup>まだ</sup>還<sup>かへ</sup>レ光<sup>ひかり</sup> 【ざんげつは有明月のこと也有明月は光のうすらぐ物

成になを光をかへさずして明らか也】

③樽<sup>そん</sup>前<sup>ぜん</sup>非<sup>ひ</sup>二語<sup>ご</sup>一 傷<sup>いたむ</sup> 【酒にえひてはことばも乱れもつゝものなれともなを言葉も正しくみだれざるをいふなり此と前の句共に人事にいはずお

とろへ乱るへき事もおとろへずみだれすといふ事也】

④戸<sup>こ</sup>中<sup>ちゅう</sup>有<sup>あり</sup>二一<sup>じん</sup>厄<sup>やく</sup>一 【こちうじんやく有といふはわが家内にわざはひのおこるべき事ありこれをつゝしみふせげよとなり】

⑤祈<sup>いの</sup>レ福<sup>ふく</sup>保<sup>たもつ</sup>二青<sup>せい</sup>一陽<sup>やう</sup> 【せいやうとは春のこと也此心ははるの陽氣ひらけて万物生ずることくなるへしとなり】

※第二句の解説は、第三句の解説欄にはみ出る。

①第八十大吉

②深<sup>しん</sup>一山<sup>さん</sup>多<sup>おほく</sup>養<sup>やしな</sup>レ道<sup>だう</sup> 【みやまの中にありて道德をしゆするをいふこれは

らわるからんとは思ひの外といふことなり】

④事一煩心緒亂【何をしてもよからぬゆへにばうぜんと心がみだるゝ也】

⑤翻作二徘徊思一【はいくわいの思ひとはとかく心が定まらずうろく／＼とすることなり】

#### ①第七十二吉

②戸一内防二重厄一【我家の内よりおもきさいなんがおこることあるべしよくつゝしみふせけよと也】

③花葉見二分枝一【このみは花のすいに出来るものなるに花とみと枝を分てみるとは家内親族不和合の形也】

④嚴一霜纒過後【きびしき霜は草木をからすもの也是は悪事さいなんをたとへていふ也わづかにすぎて後といふは此なんをやう／＼のがれ春をむかふるごとしと也】

⑤方可二始相一宜一【春のやうきをうけて是よりそろ／＼よろしき事】

#### (No. 4 表)

#### ①第七十三吉

②久暗漸分明【久しきやみはれてやう／＼ふんみやうとあきらかになりたり人の運のひらくにたとふ】

③登レ江緑一水澄【江のほとりへ至れば水みどりにすみわたりたりこれは人の上にて心かゝりなくすみたるを云】

④芝一書從二遠降一【芝書とは綸旨の類をいふなりかやうの御墨付を下されはとをき所までもきふ／＼してしたかふと也】

⑤終得二異人一成一【たいこうばう張良などのごとき異人を味かたに得て我おもふ事じやうじゆすへしと也】

#### ①第七十四凶

②蛇虎正交羅【じやもとらも人をがいするものなりこれにまじはりつらなるはあやふきこともちろんなり】

③牛生二尾多一【牛の字に尾を二ツ付れば失の字と成損失のかたち也また二ツ多きは朱の字也朱舌とて災なんをつかさどる也】

④交レ歳方成レ慶【としをまじへとは一年はじめによるこびあるべし】

⑤上下不レ能和【家内上下わがうせざる也これ第一句にいふ蛇と虎とまじはりあるかたちなり】

※第二句の解説は、第三句の解説欄にはみ出る。

#### ①第七十五凶

②孤舟欲レ過レ岸【ひとつの舟にのりてむかひのきしにわたらんとする也これは人のうへ世わたりのことをたとふ】

③浪一急渡一人空【彼きしへわたらんとするになみ／＼してわたりがたくむなく日をくらす也是世渡のかたきを云】

④女一人立二流水一【女人は心さだまらぬにかたとる流水はかんなんのかたちなり此心は前にはなん所有ていかゝはせんとあなじまよふ也此句を易にあつれば沢水困の卦なり】

⑤望レ月意情濃【此句は物事あまりに思ふやうにならぬゆへにうちなけきたるさま也月を見ればそゞろにもものかなしき情あるなり】

② 枯木未生枝【かれ木となりて枝葉も生せぬなりされともいまたといふときは一向にかれ切もせぬかたちなり】

③ 獨歩上雲岐【ひとりあゆみて雲路にのぼらんとするさま也これはおよばぬことをねがひむさぶるにたとふ】

④ 豈知身未穩【前にいふおよばぬことをねがひみづから心にくるしめ何として身のおたやかならざるをしらんと也】

⑤ 獨自惹閑非【ひとり徒然としてゐてはよからぬことをたくみ出すこと多かるべし】

#### ① 第六十八吉

② 異夢生二英傑【千万人にすぐれたる人を得ると夢に見たるなりこれは何ことにあれ吉事を目に見たれどもいまだ手にとらぬたとへなり】

③ 前來事可疑【これほどの吉事を目に見ながら我ものにならぬはいかなる事ぞとうたがひあるべしこれはいまだじせつ至らざるゆへなり】

④ 芳菲春日暖【はうひとは春のけしきをいふ也これは春のゆるやかなることくに次第に吉事にむかふじせつたうらひのとへなり】

⑤ 依舊發殘枝【此句のころは此身は前に同じけれども今はかくよるこびにあふ事をたとへば老木のかれ残るえだにはなさくこと前々に同じといふ心也】

#### ① 第六十九凶

② 名月暗雲浮【月に雲のかゝりてくらくなるごとく人の身にも思ひよらざるさいなん来りて心もくらくなるべしと也】

③ 花紅一半枯【花はくれなゐにして見事なれども半ぶんかれたりこれも人のうへに善惡まじり来るをいふ也】

④ 惹事傷心處【するほどのことがよからぬ何につけてもころをいたむばかりなり】

⑤ 行舟莫遠圖【舟をやるとは世わたりのことなりとをくはかる事なかれとは大がりの望せばあやふから】

#### (No. 4 裏)

#### ① 第七十凶

② 雷發二庭前艸【らいは百里をおどろかすといふて大なるわざはひにたとふていぜんのくさとは家内の下人などをいふわざはひは下からといふ】

③ 炎火向天飛【ほのほ天にむかつてとぶとは下上上にさかひあらそふかたちをいふ也かくのごとく上下不和にしてわざはひのおこりて世間にかくれなきてい也】

④ 一心來趕祿【少しの心得ちがひよりしてかく大さうのことになりわがろくにもかゝはるほどに成たり】

⑤ 爭奈掩朱扉【此時におよんてとぼそをおほひふせがんとするともおよばずいかんともしかたなし】

#### ① 第七十一凶

② 道業未成時【道をまなびことをはじめんとすれどもいまだ時せつ至らずじやうじゆせざるなり】

③ 何期兩不宜【何ぞこせんとは思案の外なりかくふたつなが

⑤ 昇<sup>のぼりて</sup>高<sup>たかき</sup>福<sup>ふく</sup>自<sup>おのづから</sup>昌<sup>かん也</sup>【高きくらゐにのほり福ろくおのづからさかん也  
いかさま富貴はんじやうのていなり】

①第六十三凶

② 何<sup>なん</sup>一<sup>い</sup>故<sup>ゆゑ</sup>生<sup>しやう</sup>二<sup>に</sup>荊<sup>けい</sup>棘<sup>きよく</sup>一<sup>を</sup>【けいきよくはいばらのことにて物の邪<sup>よこしま</sup>さはり  
をなすもの也横あひよりさまたげをなすにたとふ】

③ 佳<sup>か</sup>一<sup>い</sup>人意<sup>じんい</sup>漸<sup>しやん</sup>疎<sup>そ</sup>【かじんとは我家内にて大せつの人なり其人のゆだん  
よりしてけいきよくを生ずる也又人のざんげんにあひてめうへしたしき  
人と中たがふことあるへし】

④ 久<sup>きう</sup>一<sup>い</sup>困<sup>こん</sup>重<sup>かう</sup>輪<sup>りん</sup>下<sup>げ</sup>【久しくくらうするうへにまたこゝろづかひのことが  
かさなりきたるべし】

⑤ 黄<sup>わう</sup>一<sup>い</sup>金<sup>こん</sup>未<sup>み</sup>出<sup>い</sup>渠<sup>みせ</sup>【金銀さいほうもほりみぞの中にうづもれてあるかこ  
とく我まことの心もいまだあらはれぬ也】

(No. 4 裏)

①第六十四凶

② 安<sup>あん</sup>一<sup>い</sup>居<sup>して</sup>且<sup>かつ</sup>慮<sup>り</sup>レ<sup>を</sup>危<sup>あやふき</sup>【人目には安らかに見ゆれども内心にはつねに苦  
がたへぬなり末の二句かんがへ見るべし】

③ 情<sup>じやう</sup>深<sup>ふか</sup>主<sup>しゆ</sup>二<sup>に</sup>別<sup>べつ</sup>離<sup>り</sup>一<sup>を</sup>【なさけふかうしてしたしみたる人にもわかれ  
はなることあるべしとなり】

④ 風<sup>かぜ</sup>一<sup>い</sup>飄<sup>ひう</sup>波<sup>は</sup>浪<sup>う</sup>急<sup>きふ</sup>【なみかぜきふにあらしおこるなりこれは不慮のさ  
いなんにあふことをたとへたり】

⑤ 鴛<sup>うん</sup>鴦<sup>やう</sup>各<sup>かく</sup>自<sup>おのづから</sup>飛<sup>ひ</sup>【をしどりは何事にもつがひのはなれぬ鳥也それさへ  
はなれてとぶはよくのことなり】

①第六十五末吉

② 苦<sup>くる</sup>レ<sup>しん</sup>病<sup>びやう</sup>兼<sup>けん</sup>防<sup>ぼう</sup>レ<sup>を</sup>辱<sup>はぢを</sup>【やまひにくるしむうへにまたはぢをうくる事  
有べしとなりかねてとはさしませていふ也】

③ 乘<sup>しやう</sup>レ<sup>して</sup>危<sup>あやふき</sup>亦<sup>また</sup>未<sup>まだ</sup>レ<sup>を</sup>穌<sup>そ</sup>【あやふきにのぞんでいまたその場をのかれざる  
をいふなり穌はよみかへるとよむなり】

④ 若<sup>もし</sup>見<sup>み</sup>二<sup>に</sup>陽<sup>やう</sup>後<sup>のち</sup>一<sup>を</sup>【十一月を一陽来福といふこの時よりのち春にもなら  
ばといふことなり】

⑤ 方<sup>また</sup>可<sup>かに</sup>レ<sup>に</sup>作<sup>なす</sup>二<sup>に</sup>良<sup>りやう</sup>圖<sup>しを</sup>一<sup>を</sup>【りやうとはよきはかりことよむ春にもならばよき  
しあんもあるべしとなり】

①第六十六凶

② 水<sup>みづ</sup>滯<sup>とどまつて</sup>少<sup>すく</sup>二<sup>に</sup>波<sup>は</sup>濤<sup>たう</sup>一<sup>を</sup>【はたうはなみ也なみは水のはたらきなり水とこ  
ほりてはたらかざれはくさり水となる也】

③ 飛<sup>ひ</sup>一<sup>い</sup>鴻<sup>こう</sup>落<sup>らく</sup>二<sup>に</sup>羽<sup>う</sup>毛<sup>もう</sup>一<sup>を</sup>【ひこうは鴈のとぶをいふ鳥の羽をおとしたらばいか  
んともすべきやうなし此二句人の上にたとへて世わたりのてたてをうし  
なふを云】

④ 重<sup>かま</sup>レ<sup>れて</sup>憂<sup>うれ</sup>心<sup>しん</sup>緒<sup>しよ</sup>亂<sup>みだる</sup>【しんしよとはこゝろ根のこと也うれひによりて  
こゝろみたればうぜんとするなり】

⑤ 閑<sup>かん</sup>一<sup>い</sup>事<sup>じ</sup>惹<sup>ひく</sup>二<sup>に</sup>風<sup>ふう</sup>騷<sup>さう</sup>一<sup>を</sup>【うれひしづみたる所よりして心みだれかへつてさは  
ぎを引出さんとなり】

(No. 4 表)

①第六十七凶

④亦防ニ多進一退一【すゝむこともしりぞくこともならぬやうに成べし  
 ずい分此さいなんをのかるやうにすべし】  
 ⑤猶恐ニ小人 虧一【弟子子供あるひは下人などのかくることあるべ  
 しとかくするびのかたちなり】

①第五十九凶

②去一住心無一定【きよぢうの二字はさりとゝまるとよむ此句の心は行  
 ふともとゝまらふとも心のさだまらぬなり】

③行一藏亦未一寧【かうざうといふは我なすべき手わざをいふ也心か定  
 らぬゆへもの事手につかぬなり】

④一輪清皎一潔【一りんは月のことなり月のきよくすめるがごとく心  
 もすゞやかならんとすれどもなり】

⑤却被二黒雲一暝一【かへつていろ／＼のせわことかさなりさいなんに  
 あひて心のうきくもることを月のくろくもにおほひくらまざるゝにたと  
 へたり】

①第六十小吉

②高危安可一渉【高くあやふき所を行にも思ひの外安らかにわたるへし  
 と也これは人の身のうへにあやふきことにあひてもさいはいにしてふな  
 んなり】

③平坦是延年【平たんは平地なり延年は長久なり是はあやふき所も安く  
 まぬかるへけれどもねがわくは平地を行て長久をはつれよとなり下の句  
 と見合べし】

④守一守道当一逢一泰【道は仁義五常の道也道にしたがふものは安く道  
 守るべし】

にたがふものはあやふしこれを前の句にたとへてかうきとへいたんとは  
 いふなり】

⑤風雲不二遇然一【風雲は天より下す雨露のめくみなりくうせんはまく  
 れあたり也此こゝろは天より下すめくみはまぐれあたりにてはなく善あ  
 くのむくいによる也】

(No. 6 表)

①第六十一半吉

②舊一何日解【きうけんはふるぎあやまちをいふいづれの日かとけ  
 んとはいつか此あやまちをいひ開んとなり】

③戸一内保二嬋婚一【せんけんとは美人のかたち也此心は我もとより内  
 によき心をあれども少しのあやまりにかくれて人にしられぬをたとへて  
 美人戸の内にありといふ也】

④要一逢一逢二十一一口一【十一口すなわち吉の字なり吉事にあはんこと  
 をもとめばといふ事なり】

⑤遇一鼠過二牛邊一【子の日にあふて丑のかたの辺へ行たらば吉事ある  
 べしといふことなり或年月時共見るべし】

①第六十二大吉

②災轉時時退【さいかんじにしりぞき  
 る／＼しりぞき思ふこと叶ふべし】

③名一顯一四一方揚【その名四方に高く聞へてほまれあるべし】

④政一故重乗一禄【奉行頭人ともなりてよくまつりごとをおさめ  
 おひ／＼にちきやうのかぞうあるへし】



⑤故<sup>こ</sup>故<sup>こ</sup> 兩<sup>りゆう</sup> 相<sup>さう</sup> 攀<sup>はん</sup> 【ふたつなからとは俗ならば文武二道出家は仏法世法ともふたつなから得べしとなり】

①第五十吉

②有<sup>いう</sup> 達<sup>たつ</sup> 宜<sup>よろしく</sup> 二 更<sup>かへん</sup> 變<sup>へん</sup> 【のぞむことあらは今までのしほうをあらためかへる歟またはたしよへ行てよし】

③重<sup>ちゆう</sup> 山<sup>さん</sup> 利<sup>り</sup> 政<sup>せい</sup> 逢<sup>あふ</sup> 【山をかさぬれは出の字也他所に出て利を得る又山の重りたるはくらう有のかたち也くらうをいとはすしてかせけは利を得へしとなり】

④前<sup>ぜん</sup> 途<sup>と</sup> 相<sup>さう</sup> 偶<sup>ぐ</sup> 合<sup>がふ</sup> 【行<sup>ぎやう</sup> さきくまで仕あはせにあふへし行すへのことにも通すへきなり】

⑤財<sup>さい</sup> 祿<sup>りく</sup> 保<sup>ほう</sup> 二 享<sup>かう</sup> 通<sup>つう</sup> 【ざいほうも心のまゝに成べしかうつうとはうけつうずるとよむなり】

①第五十一吉

②修<sup>しゆ</sup> 進<sup>しん</sup> 甚<sup>はなはた</sup> 功<sup>こう</sup> 奇<sup>き</sup> 【しゆしんはしゆぎやうと同じたとへば家を立んとおもひて石ずへ木ごしらへする意なり】

③勞<sup>らう</sup> 生<sup>せい</sup> 未<sup>まだ</sup> 得<sup>とく</sup> 時<sup>とき</sup> 【せいをらうすとは前にいふしゆ行の功きどくにせいをたしくらうすれどもいまた時来らぬなり】

④騰<sup>あつて</sup> 身<sup>み</sup> 遊<sup>あそぶ</sup> 二 碧<sup>へき</sup> 漢<sup>かん</sup> 【へきかんは天空のこと也やうくしゆ行の功つもりてみをあげて天空に遊ぶやうに成たり】

⑤方<sup>まさ</sup> 得<sup>に</sup> 遇<sup>あふ</sup> 二 高<sup>かう</sup> 枝<sup>し</sup> 【かうしにあふとはよき居所あるひは所領何にても身のおちつき所を得べしと也】

(No. 4 裏)

①第五十二凶

②有<sup>あつて</sup> 二 須<sup>す</sup> 惹<sup>ひく</sup> 訟<sup>うつたへ</sup> 【うつたへはさうろんあるひは目うへの氣にさうひあらそひあるをいふなり】

③兼<sup>かねて</sup> 有<sup>あつて</sup> 二 事<sup>こと</sup> 交<sup>かう</sup> 加<sup>か</sup> 【交加をうてくはへてとよむ俗に一さいおこれは二さいおこるといふ事なり】

④門<sup>もん</sup> 裏<sup>りに</sup> 防<sup>ふせき</sup> 二 人<sup>じん</sup> 厄<sup>やく</sup> 【わかうちはよりたすくことのありてとかくせけんへいださぬやうに慎て時を待へし】

⑤災<sup>はわざひ</sup> 臨<sup>りん</sup> 莫<sup>もんで</sup> 嘆<sup>なげ</sup> 嗟<sup>たん</sup> 【わざひありてもなげくことなかれやかてたすくるものか出来てのちは安心すべしと也】

①第五十三吉

②久<sup>きう</sup> 困<sup>こん</sup> 漸<sup>やう</sup> 能<sup>よく</sup> 安<sup>やす</sup> 【久しくくらうせしかともやうくと万事安しんするやうになるへしとなり】

③雲<sup>うん</sup> 書<sup>しよ</sup> 降<sup>くたす</sup> 二 印<sup>いん</sup> 権<sup>けん</sup> 【雲書は貴人より給ふ所の御墨付をいふ知行の下し文又感状のたくひなり】

④殘<sup>ざん</sup> 花<sup>くわ</sup> 終<sup>ついに</sup> 結<sup>むす</sup> 實<sup>み</sup> 【花は咲ともあた花にてやうく殘花になりて実をむすふとは前の久困のことをたとへいふ也】

⑤時<sup>じ</sup> 亨<sup>かう</sup> 祿<sup>りく</sup> 自<sup>おのづから</sup> 遷<sup>うつる</sup> 【年中四季のうつりゆくことくに知行さいほうも我身の上にめぐり来てたのしきてい也】

①第五十四凶

②身<sup>み</sup> 同<sup>おな</sup> 意<sup>な</sup> 不<sup>れつて</sup> 同<sup>おなじ</sup> 【こゝろおなしからすとはつねにしあんのさだまらぬをいふまた家内不和合のかたち也】

はさんと思ふころあつてなり】

③ 禄馬引二前程一【ろくはとはちぎやうとりの事なりぜんていにひくとはゆくさきくにあらんと也】

④ 得レ遇二雲一中煎二【うん中のせんとは公家高位のかたより引立にあつかることありてなり】

⑤ 芝蘭満路生【しらんは香艸也ゆくさきいちめんにしやうじてかんはらし前の高名ほまれのあらはるゝ也】

(No. 4 裏)

① 第四十六凶

② 雷發震レ天昏【いかづちなりそらかきくもりてくらきなりせけんのはさはかしきていをいふ又天のいかり也】

③ 佳人獨掩レ門【かじんはよき人なりひとり門をほふはせけんのまじはりをせずいんしやなどのていなり】

④ 交加文一書上二【あけくれ書をよみてとくをかくしひとりつゝしみる也又書物に付て出入あるへし共】

⑤ 無一事も遭レ存【みんじやとなつて引こみゐたりしゆへいかづちにも打れず無事に過たり】

① 第四十七吉

② 更一望身一前立【万ねかひのそむことありて身のまへに来らん事をもとむるなり】

③ 何一期在二晩一成一【なんぞこせんとは思ひのほかなることはんせいとはおそくしやうしゆすることなり】

④ 若過二重一山一去【山をかさねは出といふ字也故にたひ他国する意又

山の重りたるはかんなんくらうあるのかたち也此かんなんをこらへしのひてすきさらばといふころ也】

⑤ 財一禄自相一迎【さいほうはあなたよりもちむかへ仕合ころのまゝになるへきなり】

① 第四十八小吉

② 見レ禄隔二前一溪一【たからを見てとらんとおもへどもまへにたにがありて前にゆかれぬなり】

③ 勞レ心休二更一迷一【おもふやうにならぬとて心をいためずしばらくしせつのいたるをまちてよし】

④ 一朝遭二好一渡一【しせついたればよきわたりにあふてまへなる谷をこへてたからのある所にいたるへし】

⑤ 鸞鳳入レ雲飛【ほうわうのくもに羽をのすことくしぎいを得てよろこひたのしむべし】

(No. 4 表)

① 第四十九吉

② 正一好中秋月【中秋は八月十五日名月のことなりこよひの月はことによくさへてあからかなり】

③ 蟾一蜍皎一潔間【せんちよとは月の異名なりかうけつとはすこしのくもりにて見へぬなり】

④ 暗一雲知二甚一處一【あんうんは黒くもなりいづれのところをしらんとはいづ方方を見ても雲のけしきはみへぬ也】

①第四十一末吉

②有<sup>あれども</sup>物不<sup>ものず</sup>周旋<sup>しうせん</sup>【我ものゝありなからおりふやうにやくにたゝぬなり】

③須<sup>すへかく</sup>防<sup>ふせく</sup>損<sup>そん</sup>二半<sup>はん</sup>邊<sup>へん</sup>【急にはやくにたゝぬのみならず半分もへりさふなり貸附<sup>かしつけ</sup>の古証文に似たる意】

④家<sup>か</sup>郷<sup>きやう</sup>烟<sup>えん</sup>火<sup>くわ</sup>裏<sup>うち</sup>【家内煙にまかれたることくいぶせく思ふ事しきり也】

⑤祈<sup>いのつて</sup>福<sup>ふく</sup>始<sup>はじめ</sup>安<sup>あん</sup>然<sup>ぜんたり</sup>【信をこらしていのりたはやうくけふりの中をのかれてはしめてあんどすへしとなり】

①第四十二吉

②桂<sup>けい</sup>華<sup>くわ</sup>春<sup>はる</sup>將<sup>まさ</sup>到<sup>いた</sup>【けいくわは月のいみやう也月をみればおほろにかすみて春のけしきをもよほすなり春は万物發生の時なれば万事はしむるによし】

③雲<sup>うん</sup>天<sup>てん</sup>好<sup>よし</sup>進<sup>すすむ</sup>程<sup>てい</sup>【雲天は前記たとへなり又遠くはるかなる事をもいふ程を進むとはたび立なり是は前記ことを望むにも遠くたび立するにもよしといふことなり】

④貴<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>相<sup>あひ</sup>遇<sup>あふ</sup>處<sup>ところ</sup>【しからはよき仕合にあひ貴人に取立られて望事成就するへし】

⑤暗<sup>あん</sup>月<sup>げつ</sup>再<sup>また</sup>分<sup>ぶん</sup>明<sup>めい</sup>【おほろの空はれて月のふたゝひあきらかなることくにりつしんすへし】

(No. 4 表)

①第四十三吉

②月<sup>げつ</sup>桂<sup>けい</sup>將<sup>まさ</sup>二相<sup>さう</sup>満<sup>みた</sup>【月桂とは月のひかりをいふなりあひみたんとすといふはやかてまん月にならんとする】

③追<sup>おひて</sup>鹿<sup>ろく</sup>映<sup>えい</sup>二山<sup>さん</sup>溪<sup>けい</sup>【鹿をおふとは願望あるをたとへていふさんけいにえいすとは目にみへていまた取得ぬなり】

④貴<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>乘<sup>しやう</sup>二遠<sup>えん</sup>箭<sup>せん</sup>【此ころは彼<sup>かの</sup>しかを遠箭<sup>えんせん</sup>に射取<sup>い</sup>かことく貴人より引立にあつかるなり】

⑤好<sup>かう</sup>事<sup>じ</sup>始<sup>はじめ</sup>相<sup>あひ</sup>齊<sup>せい</sup>【よきことのこれよりはじまりてよかるへし我てからにてとれぬを貴人より取て給る也】

①第四十四吉

②盤<sup>ばん</sup>中<sup>ちゆう</sup>黒<sup>くろく</sup>白<sup>ひやく</sup>子<sup>し</sup>【黒白子とははんちうに打ちらしたるこいし也これは何にてさも事あるにいまた善惡吉凶いづれともわからぬ事にたとへたり】

③一<sup>いつ</sup>著<sup>ちやく</sup>要<sup>えう</sup>先<sup>せん</sup>機<sup>き</sup>【扱此碁のかちまけは打人のきてんのきくときかぬにあり是は人の後世などにたとへて我一に利を得んことをはかるなり】

④天<sup>てん</sup>龍<sup>りゆう</sup>降<sup>くだ</sup>二甘<sup>かん</sup>澤<sup>たく</sup>【天龍かんろの水をくたし凡夫<sup>ほんふ</sup>の碁立をあらひすゝぎて神仙の碁立にかゆるなり是は天のめぐみをうけて今まで悪<sup>わる</sup>かりし事へんして吉と成を云】

⑤洗<sup>あらひ</sup>二出<sup>いだし</sup>舊<sup>きゆう</sup>根<sup>こん</sup>碁<sup>こ</sup>【きうこんの碁とは凡夫のうつごなり仙人はこをうつて寿命をのべ凡夫は碁をうつて氣をつくし寿命をちゝむ此たかひある事みつへし】

①第四十五吉

②有<sup>あつて</sup>意<sup>い</sup>興<sup>きよう</sup>二高<sup>かう</sup>顯<sup>けん</sup>【かうけんをおこすとはかうみやうほまれをあら

なるをいふなり】

⑤ 光―華當レ満レ屋【ふたゝひまん月となりてひかりかゝやきいへにみつへしと也おくと家の事なり】

(No. 4 表)

① 第卅七半吉

② 陰―爻未レ能レ通【いんあいとはくもりふさがりたる空をいふなりくもきりにて四方東西をわきまへざる也】

③ 求レ名亦未レ逢【出世をねがひ我名をあらはさんとすれともいんあいにてふさがりたることと思ふやうにならず】

④ 幸―然 須レ有レ變【今までは思ふやうにならざりしがじせつきたりてさいはひに物のへんずることありてなり】

⑤ 一―箭中二雙―鴻【矢一すちにてふたつの鴈を一度に取がごときの仕合あり鴻は大鴈をいふなり】

① 第卅八半吉

② 月―照 天書 靜【此ころば一天に雲もなくはれたる空のけしき也天書といふは天文といふに同じ】

③ 雲―生 霧彩レ霞【はれたる空にくもを生しそのうへきりかすみまで立くらむ也これは何の思ひもなき所にうれひの生ずることをたとへていふなり】

④ 久 想 離 庭 客【我おもふ人にもわかれはなるゝ程の事もいできたるへし】

⑤ 無 事 惹 二 咨 嗟【さしたる事なき時にも何となくものかなしくなげき

あるをいふなり】

① 第三十九凶

② 望―用 方 心 腹【望事あつて我しんふくの人をかたらひ用也しんふくの人とは無二のみかたをいふなり】

③ 家―郷 被 二 火 災【内より火を出すといふことなりかのしんふくとたのみたる人ころろがはりのていなり】

④ 憂―危 三 一 五 度【わざはひ内よりおこりてあやふきことたびあるべし】

⑤ 由レ損 三 斷 頭 財【其うへくびを切らるゝか又かしら役などを取あけらるゝ事あるべしとなり】

(No. 4 裏)

① 第四十末小吉

② 中―正 方 成 道【中正とは何れへもかたよらず正しきをいふかくのことくなれば物事道にかなひ無事なり】

③ 姦―邪 恐 惹 二 愆【かんしやとは悪人なり身にたとはゞ中正と無事なる所に邪氣の人ごとくふと悪人にそゝのかさるゝ也】

④ 壺―中 盛 二 妙 藥【されともこゝに一ツの妙薬あり是は人々本来具足したる本心良智にたとふ又よき人のいけんにあう事にもたとへたりこゝにおいてあやまちを改め本心に立かへる也】

⑤ 非レ久 去 二 煩 煎【本山良智の妙薬を用ゐ邪氣しりそき煩煎とはわつらはしき事さりて元の無病中出の人と成煎とはわつらひはけしくい

りつくこときをいふなり】

⑤ 一息過二天一涯いっそくぐてんがい「一息に天地をかけるなり此時のいきほひにはあへててきするものなし」

① 第三十二吉

② 似三玉藏二深一石にたりたまはかくるしんせき「玉はあれどもふかく石につゝまれてあらはれぬ也」

③ 休下将二故一眼一看上やすめよもつてこがんをみのこしめ「されとも此玉を見んと思はゞつねのまなこをもつて見る事をやめよとなり」

④ 一朝良匠別いっちようりやうしやうべつ「あるときふとよき玉工にあふて此石の中に玉のつゝまれある事をわかつ也」

⑤ 方見寶一光寒まさに見んほうくわん「此玉工の手にかけてみかきあげたらばはしめて玉のひかりをみるとなり」

① 第三十三吉

② 枯木逢一春一艶こぼくあふしゆんえん「冬がれて木も春にあふてみとりをふくむなり」

③ 芳一菲再発一林はうひとしてふたひおこるはやしに「にほひもみちてふたゝひはやしにかんばしきなり」

④ 雲一間方見一月うんかんまたにみるつき「そのうへくものはれまには月のひかりもあらはるゝなり」

⑤ 前遇二貴一人欽すんぜんふきにんのちかひに「きにんのよろこひにあふべきなり」

(No. 4 裏)

① 第三十四吉

② 臘一木春一將一らふぼくはるのいたちん「らふぼくは冬木のこと也はるいたれはふたゝひ木

の芽もさかふるなり」

③ 芳一菲喜一再一新はうひとしてよろこびまたひあらた「はうひは草木もえ出てかんはしきかたちをいふなり」

④ 鯤一鯨興二巨一浪一こんけいおこすこちうを「こんけいは大魚もおほなみをおこすはこんけい化して龍となればなり」

⑤ 舉一鉤一あぐればつりはりきく「冬木は春にあひこんけいは龍にへんすることく人もりつしんする也鉤は万望事を喩也」

① 第三十五吉

② 財一鹿須一乘一さいろくすべからくしやうせん「しかを射とむるは箭によるへし禄をもとむるはせんを行ふにしかじと也鹿音禄箭音善に通ず」

③ 胡一僧引一こそうひいてみちをかる「天竺より唐へわたり来る僧を唐にては故僧といふ也こゝにてはすへて徳ある人と見るへし」

④ 遇一あふてなうにおなじ道同二仙一せんせき「かの徳有人にしたかひ道をまなび其徳行の師と同じくなるを仙せきをおなじうすといふ也」

⑤ 光一華映二晚一暉一くわうくわんえんはんき「光花はひかる也ばんきとは夕日かけ也此こゝろはかの徳あらはれてかゝやくなりしゆ行の功つもりて後なるかゆへに夕日かけにたとへたり」

① 第卅六末吉

② 先一損後有一益まきそんしてのちありえき「はじめあしくとも後にはよきことあるべし」

③ 如二月之剥一ごとしつきの剥一はく「月しよくのはじめかけたる所あるかしだひにおわりて後元の満月になるかことし」

④ 玉一兔待二重一ぎよくとまつちゆう生一せい「きよくとは月の異名なり玉せいとはまん月に

② 望<sup>のぞむ</sup>レ<sup>る</sup> 禄<sup>ろく</sup> 應<sup>おこ</sup>ニ 重<sup>おも</sup> 山<sup>さん</sup> 【禄を望は山をかかねたるごとく満たり又重山は出の字となれば他国にいてかせきて見よ】

③ 花<sup>はな</sup> 紅<sup>くはな</sup> 喜<sup>き</sup> 悦<sup>えつ</sup> 顔<sup>がん</sup> 【花もよろこびのかんばせをひらくとは春陽のめぐみをへて時めくさまなり】

④ 舉<sup>あぐ</sup>レ<sup>る</sup> 頭<sup>かぶ</sup> 看<sup>み</sup> 二 皎<sup>けつ</sup> 月<sup>げつ</sup> 【此時にあたつてかうべをあけてあきらかなる月を見よ】

⑤ 漸<sup>やうぜん</sup> 出<sup>で</sup> 黒<sup>くろ</sup> 雲<sup>うん</sup> 間<sup>ま</sup> 【ぜん／＼に黒くもの中をはなれてひかりかゝやくとなり】

(No. 4 裏)

① 第二十八凶

② 意<sup>い</sup> 速<sup>いそ</sup> 無<sup>む</sup> 二 船<sup>ふね</sup> 渡<sup>わた</sup> 【物事急にせんとこゝろをいそげどもたよりを得ざるたとへなり】

③ 波<sup>なみ</sup> 深<sup>ふか</sup> 必<sup>かならず</sup> 誤<sup>あやま</sup> 身<sup>み</sup> 【しめて事をおこさはわさはひを引出しかへつて身をうしなふべし】

④ 切<sup>せり</sup> 須<sup>なり</sup> 回<sup>かへ</sup> 二 舊<sup>きう</sup> 路<sup>ろ</sup> 【いそぎもとのみちへかへるべし】

⑤ 方<sup>まは</sup> 可<sup>に</sup> 逸<sup>い</sup> 二 災<sup>さい</sup> 巡<sup>じゆん</sup> 【もとにかくへらばわざはひをのがるへししからざれば大きにあやふし】

① 第二十九吉

② 憂<sup>ゆう</sup> 轉<sup>かん</sup> 漸<sup>やう</sup> 消<sup>しょう</sup> 融<sup>ゆう</sup> 【としつきつもるこゝろのうれひもやう／＼にきえうせて】

③ 求<sup>もと</sup>レ<sup>る</sup> 名<sup>な</sup> 得<sup>え</sup> 二 再<sup>また</sup> 通<sup>つう</sup> 【身を立名をしられんと思ふこゝろざしのつうずるなり】

④ 寶<sup>ほう</sup> 財<sup>さい</sup> 臨<sup>りん</sup> 二 禄<sup>ろく</sup> 位<sup>ゐ</sup> 【ざいほうはいふにおよばすちきやうくらゐをものぞまば奉公すべし】

⑤ 當<sup>まさ</sup>レ<sup>る</sup> 遇<sup>しゆ</sup> 二 主<sup>しん</sup> 人<sup>じん</sup> 公<sup>こう</sup> 【よきしゆ人にあふてとりたてらるへしと也】

① 第三十半吉

② 仙<sup>せん</sup> 鶴<sup>くわ</sup> 立<sup>たつ</sup> 二 高<sup>かう</sup> 枝<sup>し</sup> 【高きえだにつるの立たる也是はよろこび事の目にみへて手にとられぬたとへなり】

③ 防<sup>ふせ</sup>レ<sup>る</sup> 他<sup>た</sup> 暗<sup>あん</sup> 箭<sup>せん</sup> 麈<sup>かく</sup> 【此つるを他人のとらん事をおそれ守りふせがんとして弓はあれども箭はなしとなり是は目前に吉事あれども手に取るてたてなきを書】

④ 井<sup>せい</sup> 畔<sup>はん</sup> 剛<sup>かう</sup> 刀<sup>たう</sup> 利<sup>り</sup> 【此句の心は井はおち入かたち也うしろにかたきあり前にはおとしあなありしんたいきはまりていかんともしかたなきていなり】

⑤ 戸<sup>こ</sup> 内<sup>ない</sup> 更<sup>さら</sup> 防<sup>ふせ</sup>レ<sup>る</sup> 危<sup>あやふ</sup> 【これのみならず其うへ家内にあやふき事有り外を捨て内をふせげと也是は目にみへたる利有ともそれをば見切て内の用心をよくせよとなり】

(No. 4 表)

① 第卅一末吉

② 鯉<sup>こん</sup> 鯨<sup>げい</sup> 未<sup>い</sup> 變<sup>へん</sup> 時<sup>とき</sup> 【こんけいといは大魚なり化して龍となるへんせさるとはいまた時のいたらぬ也】

③ 且<sup>かつ</sup> 守<sup>まも</sup> 二 碧<sup>へき</sup> 潭<sup>たん</sup> 洪<sup>ほう</sup> 【あをきふち口身をひそめて時いたるをまつへし此時わるくすれば人にとらるゝなり】

④ 風<sup>ふう</sup> 雲<sup>うん</sup> 興<sup>おこ</sup> 二 巨<sup>こ</sup> 浪<sup>なみ</sup> 【ついに龍とへんして天上の時いたり風雲おほなみをおこし一いきに天地を過】

くものちりはるゝなり】

③看みよ看月再明【くもりしそらはれわたり月のひかり一天にかゝ

やくを見るべし】

④逢あひて春花はるはな草秀くさうひで【冬がれし木も春にあへは芽をいだし花さきくさ葉も

さかへひいづる也】

⑤雨あめ過竹すきてたけ重青かさねてあをし【竹はつねに青けれども雨ふれはますゝ色ふかく

なるなり雨はめぐみうるほはすをいふ】

### ①第二十三吉

②紅雲こううん随したがつて步起ほにおこり【こううんはめでたきずるさう也ほにしたかつて起

るとはすゝむにしたかひよきてがゝりあるへし】

③一いつ箭中せんあた青霄せいせう【一せんは我心なり是を箭にたとへたりせいせう

にあたるとはりつしん出世の望成就する也】

④鹿行ろくかう二千ふたにせん里遠りのとほ【鹿はしか也是をいとめんと思へ共千里の遠きに行

たらばいられまじき也又鹿青緑に同し是は緑をむさぼりてやまぬを千里

の遠きにたとふ】

⑤争いかでかしらん知きよ去路のほろかなたを遥たう【前にいふ足ことを知らず及ぬ望に深入して後

悔する事をいかでしらんといましめたる詞也】

### ①第二十四凶

②三さん女莫にふなかれ二相あひ逢あひて【三女は姦の字也かたまし共かしましともよむあ

ひあふことなかれとはさけしりぞけよ也】

③盟めい言説ごんげ未通もいつせ【めいごんとはちかひ也我ちかひを立誠にあらはせ

とも姦人中をへたてゝつうぜぬ也】

④門もん裏心りにしん肝掛かんかゝる【とは悶の字也もだゆるとよむ我こゝろの先へつうぜぬ

事をもだへくるしむ也】

⑤縞かう素そ子重しちゆう重なり【とは絹にていくゑもつゝみたるかたち也是も思ひの

つうじかたきにたとふ心長く誠を尽て終に通す】

### (No. 4 表)

#### ①第二十五吉

②枯こ木遇くもあひて春生はるにやうす【かれ木もはるにあふてふたゝび芽をいだすなり】

③前途ぜんと必利かならず亨かう【ぜんどはゆくさき利かうはしあはせよきをいふなり】

④亦得またえたり二佳ふたえたり人箭かじんのせんを【そのうへよき人のめぐみをえて】

⑤乘じようじて車くるまに禄つもの自おのつから行ゆく【さいほうをくるまにつみてゆくべしとなり】

#### ①第二十六吉

②将軍しやうぐん有あり異聲いせい【いせいありとは此人名將の聞ありて四方にかくれな

きをいふ也】

③進すすむ兵へい萬ばん里程りのぢやう【つはものを遠き国につかはしててきをうたしむる也

これは万の望事にあてゝ見るべし】

④争いかでかしらん知きよ臨しん敵處てきした【てきにむかふてかけ引は大将の下知しだい也か

ちまけはいかでかしらんいまだわからぬ也争知の字眼をつくべし】

⑤道みち勝すぐれて却しりぞく虚名きよめい【きよめいをしりぞくとはほまれをあらはす也又

かへつて名をむなくすともむ時は道すくて理を持なから非におつる

也大将のこゝろへ大事也】

#### ①第二十七吉

- ② 離<sup>はなれ</sup>暗出<sup>あんしゅつ</sup>明時<sup>めいじ</sup>【くもつたそらはれわたりて月のいづるごとくな  
り】
- ③ 麻<sup>あ</sup>衣<sup>え</sup>変<sup>へん</sup>緑<sup>りよく</sup>衣<sup>え</sup>【あさのころもはへんじてみどりのころもとなるべ  
し】
- ④ 旧<sup>きう</sup>憂<sup>いう</sup>終<sup>しゆう</sup>是<sup>これ</sup>退<sup>しりぞく</sup>【久しきうれひもしだいにしりぞき今は心やすらかな  
り】
- ⑤ 遇<sup>あひて</sup>祿<sup>ろく</sup>應<sup>えい</sup>交<sup>かう</sup>輝<sup>き</sup>【さいほうるせいもましてあたりにかゝやく氣<sup>け</sup>しきな  
り】

(No. 3 表)

- ① 第十九末小吉
- ② 家<sup>か</sup>道<sup>だう</sup>生<sup>しやう</sup>荆<sup>けい</sup>棘<sup>きやく</sup>【家道は我いとなみ也それにいはらのもすそに  
かゝるごとくさはり出来也されどもいはらは無心のものなれば此方より  
よければさなりなし】
- ③ 兒<sup>じ</sup>孫<sup>そん</sup>防<sup>ふせき</sup>虎<sup>こ</sup>威<sup>ゐ</sup>【とらは猛威<sup>まうゐ</sup>をふるふあく獣<sup>じう</sup>也そのごとくにいせい  
つよき人を恐れわざはひをまぬがれんとする也】
- ④ 香<sup>かう</sup>前<sup>ぜん</sup>祈<sup>いの</sup>二<sup>ふく</sup>福<sup>こう</sup>厚<sup>こう</sup>【あつくつゝしみてつねに信をいたし天道をあが  
めさいはひをいのらば】
- ⑤ 方<sup>まに</sup>得<sup>えん</sup>免<sup>めん</sup>二<sup>ぶん</sup>分<sup>り</sup>離<sup>を</sup>【信力にて家内はなれぐとなることをまぬが  
るべし】

① 第二十吉

- ② 月<sup>つき</sup>出<sup>いで</sup>漸<sup>ぜん</sup>分<sup>ぶん</sup>明<sup>みやう</sup>【此句はそろ／＼とあかりへ出るてい也諸事すゝむ  
所あるにたとふ月出てあきらかなりといへとも夜の道なれば星のごとく

ならずなをつゝしみあるべき也】

- ③ 家<sup>か</sup>財<sup>さい</sup>毎<sup>まい</sup>毎<sup>まい</sup>榮<sup>えい</sup>【此句は望事あるをたとふ前の句に云夜道をたとること  
くつゝしみふかく用心していかにも此望をたつせんとすゝみ行ば道中ぶ  
なんに望をたつすといふ】
- ④ 何<sup>なん</sup>言<sup>ご</sup>言<sup>ご</sup>先<sup>せん</sup>有<sup>いう</sup>満<sup>みつ</sup>【此句は前の二句の意をうけていふ月のあかきに足  
もとのけかもなく少しの利を得て早心おごりて夜道なる事をわすれゆだ  
んせばあやふからんと也】
- ⑤ 更<sup>ましろ</sup>變<sup>へん</sup>立<sup>りて</sup>二<sup>たつ</sup>功<sup>こう</sup>名<sup>めい</sup>【此句は前の三句をむすびていふ前にいふごとく  
つゝしみてふかくしてぜん／＼にすゝみ行はつひに夜も明はなれて白昼  
とへんじて大きに功を立んと也】

① 第二十一吉

- ② 洗<sup>あらひ</sup>出<sup>いで</sup>経<sup>けい</sup>年<sup>ねん</sup>否<sup>いな</sup>【あらひいたすといふは何事にも前のあしきこと  
をあらためかゆるなり年をふるとは其功をつむ也】
- ③ 光<sup>くわう</sup>華<sup>くわ</sup>得<sup>え</sup>二<sup>ふた</sup>再<sup>さい</sup>清<sup>せい</sup>【くわうくわはてりかゝやく事也ふたゝびきよ  
きはあらひ出したるこのあらはるをいふ也】
- ④ 所<sup>ところ</sup>求<sup>もとむ</sup>終<sup>しゆう</sup>吉<sup>きち</sup>利<sup>り</sup>【ねがひもとむ事みな／＼吉事にならふぞとなり  
前の功によるがゆゑ也】
- ⑤ 重<sup>ちゆう</sup>日<sup>じつ</sup>照<sup>てい</sup>二<sup>ふた</sup>前<sup>ぜん</sup>程<sup>てい</sup>【日をかさぬるにしたがつて行さきてりかゝやきや  
うすよくなるべしぜんでいは行末の事也】

(No. 3 裏)

① 第二十二吉

- ② 漸<sup>ぜん</sup>濃<sup>なん</sup>雲<sup>うん</sup>散<sup>さん</sup>【ちよううんとはあつきくもなりぜん／＼にあつき  
き

(No. 38 表)

- ①第十二大吉  
②手把てにたつて太たい陽輝やうのひかりを【たいやうは日りんのことなり手にそのひかりをとるといふは春の氣をもたらずなり】  
③東とう君發くんはつ舊きう枝しに【東くんははるを司る神なりきうしにはつすとはふるき枝も木のめだち春めくさま也】  
④稼か苗方べうまはつ欲ひいふ秀と【かべうはなはしろのたぐひなりまさにひいで長せんとする次第にさりゆくてい也】  
⑤猶更上なほうへに雲梯うんてい【くもにかけはしのぼりかたき所にものぼるへしとなり】

①第十四末吉

- ②石玉せきぎよく未なほ分わか時とき【玉はあれどもいまだみがさればいしも玉ともわかつたるなり】  
③憂ゆう心轉しんをころも更さら悲かなしむ【いかにしてまことの玉を得んとおもふに迷ひの心ありてなをまよふ也】  
④前ぜん途通大とつうたい道だうに【されどもしせつをまちたるかひありてゆくさきは大道に出べしと也】  
⑤花發はなひらいて應おう殘ざん枝しに【いまはしせついたりてそれく花さきさかゆるなり】

①第十五凶

- ②年とし乖そむひて數亦はまた孤こなり【としそむくとはとし老て也かずある人にもはなれひとり身となりてたよりなき也】

- ③久きう病未びやういまだ能あたは蘇そすこ【久しくやみつかれていまた本ぶくせざるなり】  
④岸きし危あやふし舟未ふねいまだ登のぼる【きしにもつかずたゞよふ舟のごとし】  
⑤龍りゆう臥失ふしてうしなふ明めい珠しゆを【龍のたまをうしなひては「」もいきほひもうせ「」】

(No. 38 裏)

- ①第十六吉  
②欲ほつして政まつりごと重じゆうす成なり望のぞみ【まつりごとを正し子そんはんじやうを得んとおもはる】  
③前途ぜんと喜よろこび亦寧またやすし【ゆくすへやすらかにしてよろこび事もあるべし】  
④貴き人相にんあひ助處たすけところ【きにんよりめをかけたすけあるにより】  
⑤祿ろく馬照ばてう二前程ぜんてい【くわんるちぎやうもわがおもふまゝになるべきなり】

①第十七凶

- ②怪あやしみ異こと防に憂い惱なを【いろくのあやしみありてうれひなやみをふせがんとすれば】  
③人にん宅見たくみる二分ぶん離り【家内ちりぐになりてとかくに思ひあはぬ事あるべし】  
④惜おしんて花還はなをへつて値あめに雨あめ【手にもちたるものもとりおとすかごとく思ふ事もたがふなり】  
⑤杯はい酒しゆひく惹かん閑ひを非ひを【せんかたなく酒などのみてうれひをわすれんとするばかり也】

①第十八吉

- ② 登<sup>のぼ</sup>レ舟<sup>ふね</sup>待<sup>まち</sup>二便<sup>べん</sup>一風<sup>ふう</sup>【ふねにはのりたれどもじゅんふうがなしと也】  
 ③ 月<sup>げつ</sup>一色<sup>しき</sup>暗<sup>あん</sup>朦<sup>もう</sup>朧<sup>ろう</sup>【月のひかりもくもりてもうろうとくらしとなり】  
 ④ 欲<sup>ほつ</sup>下<sup>げ</sup>碾<sup>せん</sup>二香<sup>かう</sup>一輪<sup>りん</sup>去<sup>さ</sup>上<sup>じやう</sup>【くるまにのりてゆかんとすればなり】  
 ⑤ 高<sup>かう</sup>一山<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>一萬<sup>まん</sup>里<sup>り</sup>【山たかふしてふねも車も行ことかなはずと也】

- ① 第八大吉  
 ② 勿<sup>なかれ</sup>二頭<sup>づ</sup>一中<sup>ちゆう</sup>尾<sup>お</sup>見<sup>みる</sup>【こころざしをたかくもちていやしきわざをなすへからずとの心なり】

- ③ 文<sup>ぶん</sup>一華<sup>くわ</sup>須<sup>す</sup>レ得<sup>とく</sup>レ理<sup>り</sup>【しからば身の才四方にあらはれ理を得べきなり】  
 ④ 禾<sup>くわ</sup>一刀<sup>たう</sup>自<sup>じ</sup>偶<sup>ぐ</sup>然<sup>ぜん</sup>【禾は稲なり刀は鎌也くせんははらずしてあふ也いふこころは稲はみのり幸ひ鎌は手に有也】  
 ⑤ 當<sup>あた</sup>レ遇<sup>ぐ</sup>二非<sup>ひ</sup>一常<sup>じやう</sup>喜<sup>き</sup>【おもひのまゝの仕合にてつねになきよろこびにあふべしとなり】

- ① 第九大吉  
 ② 有<sup>ゆう</sup>一<sup>い</sup>名<sup>めい</sup>須<sup>す</sup>レ得<sup>とく</sup>レ遇<sup>ぐ</sup>【名をあげ人にしられんとおもはざるのぞみのまゝなるべし】  
 ③ 三<sup>さん</sup>一<sup>い</sup>望<sup>ぼう</sup>一<sup>い</sup>期<sup>き</sup>遷<sup>せん</sup>【三ツののぞみも一ときに叶じせつたうらいせり】  
 ④ 貴<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>來<sup>きたり</sup>指<sup>さ</sup>レ處<sup>とこ</sup>【ところをさすとは貴人目うへの引まはしにあづかるなり】  
 ⑤ 華<sup>くわ</sup>一<sup>い</sup>菓<sup>くわ</sup>應<sup>おう</sup>レ時<sup>とき</sup>鮮<sup>せん</sup>【花もこのみもときにあたつて有べしとなり】

(No. 37 裏)  
 ① 第十大吉

- ② 舊<sup>きう</sup>用<sup>よう</sup>多<sup>た</sup>成<sup>せい</sup>レ破<sup>は</sup>【ふるくなしたる事はやぶれあらたまるべし】  
 ③ 新<sup>しん</sup>更<sup>かう</sup>始<sup>はじめ</sup>見<sup>みる</sup>レ財<sup>さい</sup>【もの事あらたまりてのちはしめてよろこびにあふべし】  
 ④ 政<sup>せい</sup>求<sup>もとむ</sup>二雲<sup>うん</sup>一外<sup>ぐわい</sup>望<sup>ぼう</sup>【うんぐわいとおよびもなきのぞみをかくるともといふことなり】  
 ⑤ 枯<sup>こ</sup>一木<sup>ぼく</sup>遇<sup>ぐ</sup>レ春<sup>はる</sup>開<sup>ひらく</sup>【かれ木のはるにあふて花のひらくやうにすへはんじやうすへしとなり】

- ① 第十一大吉  
 ② 有<sup>ゆう</sup>一<sup>い</sup>禄<sup>ろく</sup>興<sup>かう</sup>二家<sup>か</sup>業<sup>げふ</sup>一【福禄身にそなはりて家げふをおこしさかゆへきなり】  
 ③ 文<sup>ぶん</sup>一華<sup>くわ</sup>達<sup>たつ</sup>二帝<sup>てい</sup>都<sup>と</sup>一【その身の才芸みやこまでもかくれなし】  
 ④ 雲<sup>うん</sup>一<sup>い</sup>中<sup>ちゆう</sup>乘<sup>じやう</sup>二好<sup>こう</sup>箭<sup>せん</sup>一【うんちうに矢をはなつて少しもかけさはりなく立身すべし箭は矢なり】  
 ⑤ 兼<sup>かね</sup>得<sup>とく</sup>二貴<sup>き</sup>一<sup>い</sup>人<sup>にん</sup>扶<sup>たすけ</sup>【きにんのたすけもあらんとなり】

- ① 第十二大吉  
 ② 楊<sup>やう</sup>一<sup>い</sup>柳<sup>りゆう</sup>遇<sup>ぐ</sup>レ春<sup>はる</sup>時<sup>じ</sup>【やなぎもはるにあふてみどりをふくむなり】  
 ③ 殘<sup>ざん</sup>一<sup>い</sup>花<sup>くわ</sup>發<sup>はつ</sup>二舊<sup>きう</sup>枝<sup>せ</sup>一【ざんくわきうしにひらくとは十分にさきそろふたなり】  
 ④ 重<sup>ちゆう</sup>一<sup>い</sup>霜<sup>そう</sup>雪<sup>せつ</sup>裡<sup>うち</sup>【しもゆきの重々とかさなりたるうちにも】  
 ⑤ 黄<sup>わう</sup>一<sup>い</sup>金<sup>こん</sup>色<sup>しき</sup>更<sup>さら</sup>一<sup>い</sup>輝<sup>か</sup>【わうこんいろをへんせずかゝやくなり】

①第二小吉

②月被<sub>レ</sub>浮<sub>一</sub>雲翳<sub>一</sub>【月はあれどもくもにかくれてひかりが見へぬぞといふことなり】

③立事<sub>一</sub>自<sub>一</sub>昏迷<sub>一</sub>【立て見てもつい見へねはおのづからころもくらくまよふぞとなり】

④幸<sub>一</sub>乞陰<sub>一</sub>合<sub>一</sub>祐<sub>一</sub>【まことをつくし時せつをまたはさいはひのたすけありて】

⑤何<sub>一</sub>慮<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>眉<sub>一</sub>【よろこびのまゆをひらくべしとなり】

①第三凶

②愁<sub>一</sub>悩損<sub>一</sub>忠良<sub>一</sub>【忠義をつくしてもそのかうがあらはれぬゆへにうれへなやむなり】

③青<sub>一</sub>霄<sub>一</sub>炷<sub>一</sub>香<sub>一</sub>【ころろざしの通じかたきをたとへば大ぞらにむかつて香をたゞ一トたきせしほ也】

④雖<sub>レ</sub>然防<sub>一</sub>小過<sub>一</sub>【されども少しのあやまちをふせぎて身をつしめ】

⑤閑<sub>一</sub>慮學<sub>一</sub>時長<sub>一</sub>【しづかにおもいはかりてじせつをまちたいくつすまじとなり】

(No. 36 裏)

①第四吉

②累有<sub>一</sub>興<sub>一</sub>雲志<sub>一</sub>【ころろざしとは忠義をはげみりつしん出世をねがふなり】

③君<sub>一</sub>恩祿未<sub>レ</sub>封<sub>一</sub>【されどもちぎやうおんしやうはいまだあておこなは

れずといへどもますくはげむべし】

④若逢<sub>一</sub>二侯<sub>一</sub>手印<sub>一</sub>【ふと君の目にとまりてもあふなくば年来の功があらはれ】

⑤好事<sub>一</sub>始念<sub>一</sub>【いよく吉事がかさならふぞと也】

①第五凶

②家<sub>一</sub>道未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>昌<sub>一</sub>【いへのみちはいまたさかんにはならず】

③危<sub>一</sub>危保<sub>一</sub>禍殃<sub>一</sub>【つねにわざはひたへずたゞあぶくとおもふて日をおくる】

④暗<sub>一</sub>雲侵<sub>一</sub>月桂<sub>一</sub>【はるゝ月のかきくもるごとくものおもひのたゆるまてなし】

⑤佳人<sub>一</sub>炷<sub>一</sub>香<sub>一</sub>【かうをたきせいくに天道をいのるべし】

①第六末吉

②宅<sub>一</sub>墓鬼<sub>一</sub>凶多<sub>一</sub>【家内に物のたゞりなど有てとかくさはりが多しとなり】

③人<sub>一</sub>事有<sub>一</sub>交<sub>一</sub>訛<sub>一</sub>【人のうへにもりやうけんちがひの事などあるべし】

④傷<sub>レ</sub>財損<sub>一</sub>失防<sub>一</sub>【けんやくをつとめもの事にねん入そんしつをふせぐへししからば苦にはなるまじと也】

⑤祈<sub>レ</sub>福<sub>一</sub>始中<sub>一</sub>和一<sub>一</sub>【天道をいのりせいくをつくさばわざはひしりぞき家内おだやかなるべし】

(No. 37 表)

①第七凶

御祈禱日供講御守護

心城院

【裏面墨書】

日供

No. 29 真言

(オン) (マ) (カ) (キヤ) (ロ) (ニ) (キヤ) (ソワ) (カ)

No. 30 真言

(オン) (キリク) (ギヤク) (ウン) (ソワ) (カ)

No. 31 真言

(オン) (ギヤク) (ギヤク) (ウン) (ソワ) (カ)

No. 32 真言札

我有微妙法 世間甚稀有

(オン) (キリク) (ギヤク) (ウン) (ソワ) (カ)

衆生受持者 皆與願滿足

【裏面墨書】

大正六年四月吉日

湯島 聖 天堂

醍醐代

No. 33 立春大吉祥

(シリ) 立春大吉祥

【裏面墨書】

昭和廿八年十二月廿日 心城院

No. 34 大般若經轉讀札

歡喜天寶前

大般若經轉讀札 心城院

No. 35 奉転読大般若經六百軸福壽增長祈攸

(チクマン) 奉轉讀大般若經六百軸福壽增長祈攸

【裏面墨書】

チクマン

本郷湯島 心 城 院

No. 36 52 御關

(No. 36 表)

①第一大吉

②七寶浮圖塔しつほうふ とのたう 金銀しゆぎよくの七ほうをちりばめたるたからのたう

なり人ならばくらゐ有人なり

③高峯頂上安かうほうちやう じやうにあんす 安 〔たかきみねのうへに立たらばいよくたつとく見

ゆるぞとなり〕

④衆人皆仰望しゆにんみなまう ぼうす 〔しゆにんあをぎのぞみてたつとふなり〕

⑤莫作三等閑看なかれ なすこと とう かんのかんを 〔此人はなをざりには見られまいぞ大人ならばい

よく大吉なり〕

扱また下品の供養とは  
 上分とりて天尊に  
 きはまりなしと説給ふ  
 士農工商この天を  
 夫婦の中のあしきにも  
 たちまち和順し睦しく  
 むらがり来りて仕ふ也  
 おの／＼媚を献じつゝ  
 金谷の春のあしたには  
 南楼の秋の夕には  
 逍遙第一このむもの  
 たのしみ心に叶ひつゝ  
 また懷妊の女人には  
 平産心のまゝにして  
 その外すべての病いたみ  
 (No. 2 裏・符丁「四」)  
 又は怨念呪咀せられ  
 忽解て障りなし  
 使呪法経に説給ふ  
 広き恵みの功德をば  
 たうとき教にもとる也  
 信をおこして朝夕に  
 福祿家にみち／＼て  
 あな尊としやその徳を  
 いさゝか功德を讃しつゝ  
 我人ともに現未來  
 一たひ唱ふを縁として  
 常に調ずるもの皆の  
 供じまつらば富貴をも  
 されば出公はじめとし  
 供養しまつらで有べきぞ  
 ひとへに此尊たのみなば  
 家とゝのえば奴婢までも  
 紅顔玉姿の美女は又  
 かたへに侍りてみちみてり  
 香美の花を弄び  
 さやけき月に嘯きて  
 唯此天を念じなば  
 いさゝかうき事なかるべし  
 一入此天祈念せよ  
 行歩自在になし玉ふ  
 願ふに本復なさしめん  
 悩む身とても念ずれば  
 皆此文は将来の  
 かかる化益の海よりも  
 秘めてのべずは此尊の  
 有縁の輩一心に  
 唯怠らすつとめなば  
 齢を龜鶴とともにせん  
 演るに言葉も及ばねど  
 大悲の光をあらはして  
 二世の悉地を成就なし  
 龍花の会場に値遇せむ

歡喜天和讃終

(題箋)

歡喜天和讃

歡喜天和讃

No. 23 浴油供御牘

法主

浴油供御牘 柳井堂

No. 24 歡喜天長日華水供之御牘

法主

歡喜天長日華水供之御牘 柳井堂

No. 25 華水供御牘

湯島

華水供御牘 柳井堂

No. 26 御祈禱浴油供御牘

湯嶋

御祈禱浴油供御牘 柳井堂

No. 27 星供御守護

星供御守護

No. 28 御祈禱日供講御守護

柳井山

福德才智あるはまた  
ねがふにまかせ垂給ふ  
延命望にしたがはせ  
この名号を唱れば  
卑賤の身にも信じなば  
其外諸芸のぞむ身は  
天下に名をも揚る也  
世上の運命諸ともに  
納受あらざる宿望も  
たとへば衆生を天尊は  
救ひ給ふに似たるべし

武勇敬愛其人の  
降魔調伏除病等  
たとへ貧しきやからにも  
忽榮花のしるしあり  
高貴の官に昇るべし  
信に應じて随応し  
それ人間の榮耀といひ  
諸神を祈りたてまつり  
素願達せぬことぞなき  
慈父の愚子を慰みて  
諸神諸仏の捨てたまふ

(No. 21 裏・符丁「三」)

願ひたりとも天尊を  
皆満足をなし給ふ  
煩惱火宅の邪智なれば  
たゞいとやすく見給ひて  
仰にまかせさびたまふ  
世々の帝は御修法とて  
其外供養の壇をつき  
悉地円満ましませり  
才智東弁ねがふ人  
敬礼天尊御心に  
随応骨身に徹すべし  
惡魔万里に退けて  
七宝家宅に満ぬべし  
大海江河のうれひなく  
或は宿業つゞまりて

祈れば納受まし／＼て  
元より愚俗の境界は  
天尊これを塵よりも  
御心のまゝ福寿をも  
そもかけまくもかしこくも  
年のはじめに修し給ふ  
御祈なされたまふにぞ  
出公四民をしなべて  
自由自在になし給ふ  
叶ひたまへばその徳の  
朝夕いのるその家は  
災難千里に除きつゝ  
此天信ずるともがらは  
禽獸惡蟲向ひ得ず  
既に命葉危きに

この真言を誦持すれば  
かゝる難をも除たまふ  
いかでかむなしかるへきぞ  
授かりてよりつねぐに  
たゞおこたらず祈念せよ  
開路をたどるその時も  
影身に添て守護し給ふ  
たちまち其難のがるべし  
神通力を施こして  
隠頭こゝろにしたがひて  
射る矢も其身に立まじく  
心がけるばひたすらに  
もしまた凌突なるものゝ

忽其難のがるべし  
まして諸願の宿望は  
男女わかつたず真言を  
身を清くして朝夕に  
たとへば夜行に燭なくて  
こゝろに是を念じなば  
又は盜難劔なんも  
或は軍陣大敵も  
破敵なさしめ給ふなり  
出入礙る事ぞなき  
このゆへ武勇を専らと  
一心ふ乱にいのるべし  
とゝのふべきもうち破り

(No. 2 表・符丁「三」)

なるへき事もまたげて  
時に天尊唱ふれば  
其惡人を打碎き  
又は侵燒なるものゝ  
人の間をあしくなし  
因たるをも遠くして  
たのみまつらばたちまちに  
斧鉞を持て頭上より  
扱此天をねがふ時  
その上品の供養とは  
これを供ずる其人は  
また中品の供養とは  
これを捧ぐる輩は

万につきて惡事する  
神通力の棒をもち  
願ひも調へはべるべし  
たゞかりそめも詐りて  
親しき中も疎ましく  
終に諸難の起るとも  
その怨人を睨みつけ  
七ツに打わり給ふなり  
供養に三ツのわかちあり  
浴油供をたてまつれ  
人中王となし給ふ  
花水供をたてまつれ  
帝の師範となし給ふ

以上

歡喜天講式跋

夫大聖歡喜天者陰陽二道之根源胎金兩部之教主而大自在觀自在之所化也而世之不信者以靈天之戒德即時現悉地故或<sup>〃</sup>以為魔神邪道之類是緩閣梨之所以有講式之著也是篇分五

(No. 20 裏・符丁「十」)

段一曰本地二曰垂迹三日誓願四曰利益五日回向凡論述靈天之本委与利益之弘大未有如此篇之簡而悉者其有功于靈天匪淺小可謂忠直矣頃者亮觀兩<sup>〃</sup>士傷板葉漫滅再付諸梓以廣其伝庶幾此篇之行使有所渙釋不<sup>〃</sup>者之<sup>〃</sup>團而增長信者之渴惣乎則如杜多者亦事謂緩閣梨之孝子慈<sup>〃</sup>矣余固尊奉靈天者故及其刻成<sup>〃</sup>一言于篇末如此  
文久紀元辛酉晚春台宗沙門觀性亮順撰于湯嶋心城精舍

(落款影)

台宗 沙門  
觀性 亮順

應需書台麓隱士橘定  
時歲六十四 保 定

上木施主

藥師寺嘉兵衛  
同 駒次郎

(題箋)

大聖觀喜天講式

大聖觀喜天講式

No. 21 5 22 歡喜天和讃

(No. 21 表)

歡喜天和讃

歸命頂禮大悲尊

誓はせ給ふ言の葉を

いさゝかこゝに教化して

そも天尊と申するは

随類応現まし<sup>〃</sup>て

萬像これより生長し

男天もと是大日の

女天は大慈くわんおんの

外には忿怒の御姿も

ゆへに衆生の苦を抜て

功德の高きは天に比し

十方周遍まし<sup>〃</sup>て

大聖歡喜天王の

もふすもかしこきことなれど

衆生に示しまゐらせん

和光利物の表示にて

陰陽二つの元ぞかし

金胎兩部の教主たり

方便身を現ずなり

聖容妙相示しつゝ

内には慈悲の御心ぞ

あまねく与樂の薩埵也

利益の厚きは地に等し

衆生を守らせ玉ふなり

或ハ爲ニ兩頭愛染王ト一廻ニ愛法指南ノ

術ヲ。比シ上リニ德ヲ於天地ニ象ドリ上ルニ形ヲ於日月一。始メ

自リニ密嚴花藏ノ之土一。終リ暨ニ二分同

居ノ之郷一。塵塵刹刹トメ而無クレ所レ不レ至リ玉ハ

沙界恒沙界トメ而無シレ所レ不レ現シ玉ハ。上ハ遊ヒニ

碧落ニ下ハ入リ玉フニ黄泉ニ。爲ニ施サンガニ敬愛ヲ於諸

人ニ成リ玉ヒニ道祖行神ト。爲ニ奏センガニ善惡ヲ於閻

王ニ成ニ司命司録神ト。世世番番ノ利

益無クレ止。各各面ノ願望事トシテ而不

レ空カラ。就クレ中ニ一生ハ有リ限百年遂ニ窮マンヌ。最

期臨終ノ刻ミハ男天ハ率ニ無數之眷屬ヲ一

破リ玉ヒニ四魔ノ之羣黨ヲ。女天ハ擊ニ百寶ノ之

花臺一迎ヘ玉フニ九品ノ之淨刹一。利ハ兼ニ現當ヲ一

益ハ被ニ眞俗ニ者ヲヤ哉。仍テ唱テ歌頌ヲ一各レ可

レ行ズニ禮拜ヲ一

我有微妙法。世間甚稀有。衆生

受持者。利益無邊際。南無大聖

(No. 1 裏・符丁「八」)

大慈大悲歡喜天王。哀愍於我

悉地圓滿。第五ニ述ベ上ルトハニ回向發願ヲ一者。

諸佛菩薩ノ之度シ玉フモニ羣類ヲ一皆テ是レ斯ノ尊ノ

之方便也。諸神權現ノ之化ニ衆生ヲ一

寧ロ非ズヤニ此ノ天ノ之善巧一哉。若シ欲セバ預ニ二十

方諸佛ノ之利益ニ一者。須クレ供ニ養ス此ノ尊ヲ一。

若シ欲セバニ蒙上ラントニ一切諸神ノ之冥助ヲ一者。須ク

レ恭ニ敬此ノ天ヲ一。雖モレ致ストニ一尊一天ノ之讚

歎ヲ一。普ク増シ上ルニ諸佛諸神之威光ヲ一者ノ也。

冀以テ此ノ功德ヲ一旦ツハ資ニ天長地久ノ之

御願ヲ一旦ハ平ケンニ夷蠻戎狄ノ之異賊ヲ一。然バ

則チ西都雲晴レテ風ノ城ノ之月無クレ傾ク。東

關塵収ツテ榆柳榮ヘ。風長靜カニメ天下安

穩。海内靜謐人民有リテ慶壽福無ラン

レ量リ

抑レ我レ等ニ孝ニ親ニ一歸スルモニ三寶ニ一有テ志無ク

レ力。行ジニ衆善ヲ一救ハンモニ募貧ヲ一有テ儀無シレ遂ル。此ノ

事誰レ人カ成シレ憐ラ此ノ念ヒ何レノ時カ得シ休ヲ唯レ

願ハ本尊聖者施シ玉ヒニ轉貧與福ノ術ヲ一滿ニ

滅罪生善ノ之望ヲ一。是ヲ以テ爲ニ孝養父

母ノ爲メニ奉仕師長ノ一。爲ニ興隆佛法ノ一。爲

(No. 2 表・符丁「九」)

利益衆生ノ一。專ラ仰キエラニ此ノ靈天ヲ一速ニ欲スレ成ニ

悉地ノ風ヲ一。厥預參隨喜ノ之客。入來

聽聞ノ之人。現世ニハ永ク保チニ東父西母ノ

之齡一。兼テハ得テニ鄭白陶朱ガ富ヲ一當生ニハ必ズ

任セテニ今日値遇ノ之芳契一共ニ並ンデ歸シテニ心

月圓明覺位ニ一。乃至六趣四生。有

頂無間。同ク免ガレテニ火血刀ノ之苦ミヲ一宜クレ證スニ

正了緣ノ之三因ヲ一。仍テ唱テ歌頌ヲ一可シレ行スニ

禮拜ヲ一

願以此功德。普及於一切

我等與衆生。皆共成佛道

歡喜天咒

(オン)(キリク)(ギヤク)(ウム)(ソハ)(カ)

(オン)(ギヤク)(ギヤク)(ウム)(ソハ)(カ)

之 鷄足洞 中 遙期二十五億七

千萬歲之出生。象頭山上多隨カニ

十二天九千八百之眷屬。自リニ

四部ノ大將一至ルマデ一切鬼神ニ共ニ爲タリニ聖

天ノ變化。致シマフニ各々衆生ノ擁護。外ニハ雖レ現シマフトニ

(No. 8 表・符丁「五」)

忿怒之形ヲ内ニ住シマフニ慈悲心ニ。總是レ折

伏攝受之靈天也。豈ニ非ニ拔苦與

樂ノ薩埵ニ哉。曰ヒレ内曰ヒレ外不スレ可ラ不レ仰。

仍テ唱テ歌頌ヲ宜ク致ニ禮拜ヲ

大自在天觀世音

雙身隨類度衆生

感應道交難思議

是故我禮歡喜天

南無大聖大慈大悲歡喜天王。

哀愍於我悉地圓滿。」第三ニ明シ上ルトハ誓

願ノ殊勝ナルヲ一者。經ニ云ク上品持レ我ヲ者與

レ爲ニ人中ノ王。中品ニ持レ我ヲ者爲シ帝ノ師ト。

下品ニ持レ我ヲ者ハ富貴無ニ窮已。又タ云ク。

若シ人爲ニ諸天ノ一所レ捨念ズル我ヲ者即時

現シ悉地ヲ皆ニ満足セシメント云。當ニ知ル此ノ天ノ利

生方便超コ過 自餘ノ佛神ニ。觀 夫レ謂ヒ

人間ノ榮耀謂ヒ世上ノ運命ト。雖トモ 馮ニ諸

神ヲ一諸神ハ不レ享ニ非禮ニ之故ニ求ルニ非據ニ

者ノハ。丹誠屢空シ。雖ヘレ 仰ニ諸佛ヲ一諸佛ハ皆ナ

因ニ宿習ニ之故ヘニ無キニ宿善ニ者ハ素懷 叵

レ達シ。低頭合掌ノ之功德モ 徒 勞シニ身心ヲ。

(No. 8 裏・符丁「六」)

朝祈暮賽 勤似タリレ 費ニ幣帛。而ルニ此ノ歡

喜天王者。猶不スレ捨玉ハニ無慙ノ之惡人タモ

相ヒ同ジ賢父ノ之憐ムニ愚子ヲ。況ヤ復タ不シヤレ利セ

有緣ノ行者ヲ。宛如シ三明王ノ之任ニ忠臣ニ。

於戲可レ加加是レ爲ニ諸佛諸神ノ之

通例。不レ加加只タ限ニ大聖大天ノ之

別願ニ。因テ茲ニ貧乏ノ族ヲ唱ヘ上レハニ名號ヲ一忽チ誇ニ

豐稔ノ之歡花ニ。卑賤ノ輩凝ニ信心ヲ一即チ

登ルニ高貴ノ官班ニ。是ノ故ニ大小顯密ノ之

學侶須ク下各々致シニ法樂ヲ一以テ遂中其ノ業上。詩

歌管絃之好士 互觸ニ伎能ヲ一以テ揚ニ

其ノ名ヲ。肆 縑素男女之差レ肩ヲ堂上

如クレ花ノ。老少親疎之運ヒ歩ミヲ門前成ス

レ市ヲ。靈天誓願ノ之殊勝ナル以テレ之ヲ可ク知ンヌ

悉地成就ノ速疾ナル以テレ之ヲ可シレ察ス。仍テ唱ヘテニ

歌頌ヲ一可シレ行スニ禮拜ヲ一 弘誓深如海。

歷劫不思議。侍多千億佛。發大

清淨願。」南無大聖大慈大悲歡

喜天王。哀愍於我悉地圓滿。」第

四ニ仰ギ上ルトハニ利益ノ無邊ヲ一者。魔界佛界色

相時トモ顯ニ現此土他土ニ遊行メ依ル

(No. 9 表・符丁「七」)

レ物ニハ而メ自在ノ身著ニ慈悲ノ之甲冑一鎮ニ

婆稚羅睺ノ之鬪觀。手ニ帶ニ定慧之

弓箭ヲ一有ニ毘盧寶多ノ之邪熱。或ハ爲ニ

雙身多門天ト一振ヒ玉ヒニ多婆肖比ノ之威ヲ。

地ノ月一。迹亦男天女天ノ之體也リ。

垂ニ化於有漏界之雲ニ。大慈大悲ノ

之本誓無クレ疑ヒ。和光利物方便有リ

レ待。是以テ福德才智武勇敬愛應メ

レ願。施シ玉ヒレ之ヲ。降魔調伏除病延命隨テ

レ望ソミニ成レ之ヲ。道俗貴賤誰レカ不ラン歸敬哉。

竊以億億生死之中。難キ受ケ者ノ人

身也リ。劫劫流轉之際。難キ遭者ハ佛

教也リ。適難キ受ケ受ケ人界ノ生ヲ。幸ニ難キ逢ヒ

逢フニ聖天ノ法ニ。機縁ノ之至リ感涙叵レ禁。

方ニ今マ凝ニ丹棘於心中ニ。備ニ香華ヲ於

寶前ニ。讀シ上リテニ靈天ノ之懿德ヲ以テ祈ニ世ノ

悉地ヲ爲シニ毎日ノ之勤メト。以テ展ニ一座ノ之

講筵ヲ而已。今マ此ノ講演 略有リニ

五段一。一ツニハ 歎ニ本地ノ高廣ヲ。二ツニハ讀シ上リニ垂迹

(No. 17 表・符丁「三」)

化道ヲ。三ツニハ明シ上リニ誓願ノ殊勝ヲ。四ツニハ仰ニ利益ノ

無邊ヲ。五ツニハ述ニ回向發願ヲ也

第一歎シ上ルトニハ 本地ノ高廣ヲ一者。大聖歡喜

天王ハ者。陰陽二道ノ之根元也。萬

像自リレ斯レ生長。胎金兩部之教主

也リ。諸佛因レ茲レニ降誕。然ル間ガ華翼國

土ハ現シ玉ヘテニ毘盧遮那ニ而 輔ニ成等正覺

之道一。香集世界ニハ 示ニ大虛空藏ト一而

開キニニ福智嚴淨ノ之門ヲ一令シテ 胎卵濕化

羣萌ニ進マ中住行向地之聖位上。誠ニ是レ

往古ノ如來法身ノ之大士也リ。尋上レハ二所

居ヲ一則チ我性之乾坤也リ。渴仰シ上レハ則チ必

應ズ。求レハニ其ノ利ヲ一亦已心秘藏也。勤修

則チ定メテ至ル。以所四種ノ法身ノ中ニハ等流

法ツ身ナリ。播ニ利益ヲ於三世ニ又タ三部心ノ

間タニハ金剛部ノ心ニメ 耀ニ威光ヲ於六大無

二ニ。而モ常ニ住シ玉ヘニ瑜伽四種ノ曼荼羅ニ而互ニ

不ニ相ヒ離レ。束ニ三部ヲ一收ニ一身ニ一括ニ萬藏ヲ

論ジニ法ヲ。談ニ圓融ヲ一無作三諦ノ之妙

境也リ。觀ズレハニ權實不二ヲ一則チ非三非一ノ

之法門也リ。今マ 本地ノ甚深ナルヲ一彌ク信シ上ル

(No. 17 裏・符丁「四」)

靈天ノ奇特一。仍テ 唱ニ歌頌ニ各々可レ行メニ禮

拜ヲ

歸命毘盧遮那佛

一心法界無上尊

事理圓融住虛空

示現大聖歡喜天

南無大聖大慈歡喜天王。

哀愍於我悉地圓滿。」第二ニ讀シ上ルトハ 二垂

迹化道ヲ一者。男天ハ則チ大自在天ノ之

所變 退ソケニ天上天下ノ之魔軍ヲ一施コシ玉ヒニ今

世後世ノ利益ヲ一。女天ハ是レ觀自在尊

之應化也リ。現シ玉ヒニ二十一面ノ之聖容一

示ニ三十三身ノ之妙體ヲ。夫婦抱立

形 彰ニ二十界俱融ノ之理ヲ。或ル時ハ現シ玉ヒニ二

臂ヲ一或ル時ハ現シ玉フニ六臂ヲ一。皆是レ和光利物ノ

之表示。隨類應同ノ之相貌也リ。加

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五  
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不  
異色色即是空空即是色受想行識亦復如  
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨  
不增不減是故空中無色無受想行識無眼  
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至  
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死  
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無  
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無  
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢  
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故  
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜  
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等  
咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜  
多咒即說咒曰揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧  
揭諦菩提娑婆訶

般若心經

(題箋)

般若心經

般若心經

般若心經

般若心經

般若心經

No. 16 20 聖天講式

(No. 16 表)

聖天講式

我此道場如帝珠。聖天部類影  
現中。我身影現本尊前。頭面接  
足歸命禮。  
南無。大聖歡喜天王。部類眷屬  
降臨道場。哀愍於我悉地圓滿

次傳供

願此香華雲。飲食燈明海。供養  
歡喜天。一一皆納受。南無歸命  
頂禮。大慈大悲歡喜天王

次法用 如常或三禮如來唄

謹敬白。下淨妙法身摩訶毘盧遮  
那。四智四行十三大院。三部五  
部諸尊聖衆。金剛甘露甚深秘  
藏。四攝八供諸大菩薩。六通四  
辯聲聞衆僧象頭人身摩訶頭  
伽囊鉢底。九千八百部類眷屬。  
摧壞一牙無憂大將埜干部主。

(No. 16 裏・符丁「二」)

諸毘那夜迦眷屬等。乃至佛眼  
所照微塵刹土海會聖衆。上而言  
夫。大聖歡喜天王。者。天德巨測  
高。覆。以。無。外。地。望。易。成。廣。載。以。不  
不。棄。之。周。徧。十。方。二。衛。護。三。寶。一。本  
則。等。覺。妙。覺。尊。也。祕。二。位。於。無。垢

法。乃至七日。隨心所願。成即得稱意。正灌油  
時。數數發願。用酥蜜。和麩作團。蘿蔔根。并蓋  
酥酒漿。如是。日成獻食。必須自食。方得氣力  
爾時。毘那羅曩伽。將領九千八百。諸大鬼王。

(No. 14 裏・符丁「三」)

遊行三千世界。我等所爲。神力自在。遍歷諸  
方。奉衛三寶。已大慈悲。利益衆生。向於世尊。  
俱發聲言。我以自在神通。故號毘那羅曩伽。  
亦名毘那羅夜迦。亦名毘微那曩伽。亦曰摩訶  
毘那夜伽。如是四天下。稱皆不同。我於出世。  
復有別名。即以神變。昇虛空。而說偈言  
我有微妙法。世間甚稀有。衆生受持者  
皆與願滿足。我行順世法。世示稀有事  
我能隨其願。有求名遷官。我使國王召  
有求世異寶。使世積珍利。家豐足七珍  
世皆所稀有。有求色美者。發願宛然至  
莫須言遠近。高貴及難易。志心於我者  
我使須臾間。有衆生疾苦。顛狂及疥癩  
疾毒衆不利。百種害加惱。誦我陀羅尼  
無不解脫者。獨行暗冥處。依我皆無畏  
却賊忽然侵。我皆令自縛。若欲自然福  
若有求女人。夫心令得女。我必令相愛  
世間陵突者。我悉令摧伏。逍遙自快樂  
宛然無所乏。有念皆稱遂。隨有咸滿足  
設衆惡來侵。我使如其意。我悉能加護  
住居皆古慶。宅舍悉清寧。男女得英名  
夫妻順和合。上品持我者。我與人中王

中品持我者。我與爲帝師。下品持我者  
富貴無窮已。恒欲相娛樂。無不充滿足  
奴婢列成羣。美女滿衛庭。遊行得自在  
隱顯能隨念。出入無所礙。無能測量者  
我於三界中。神力得自在。降世稀有事  
我皆悉所爲。若爲我所能。窮却不能盡

(No. 15 表・符丁「三」)

持我陀羅尼。我皆現其前。夫妻及眷屬  
當隨得衛護。我有遊行時。誦我即時至  
過於險難處。大海及江河。深山險隘處  
師子象虎狼。毒蟲諸神難。持我皆安穩  
若有侵燒者。頭破作七分。壽命悉長遠  
福祿自遷至  
爾時。毘那羅夜迦。說是偈已。告世人言。說處  
世陀羅尼法。最護衆生。隨其所願。皆得滿足。  
當須日夜。誦持。滿十萬遍。乃至二十萬遍。皆  
得如所說。即昇虛空。即說咒曰

(真言)

曩牟毘那羅夜迦。誦悉知目佉寫。恒姪  
佉。三阿智耶那智耶。殊勝帝耶。六烏悉  
曇迦耶。七悉婆拖鉢耶。八婆達薩寫耶。  
九婆喇跛遲。十莎訶

大聖歡喜天使咒法經

No. 15 (裏) 摩訶般若波羅蜜多心經

摩訶般若波羅蜜多心經

中品持我者 我與爲帝師 下品持我者  
富貴無窮已 恒欲相娛樂 無不充滿足  
奴婢列成群 美女滿衢庭 遊行得自在  
隱顯能隨念 出入無所礙 無能測量者  
我於三界中 神力得自在 降世稀有事  
我皆悉所爲 若說我所能 窮却不能盡

(No. 13 表・符丁 (三))

持我陀羅尼 我皆現其前 夫妻及眷屬  
當隨得衛護 我有遊行時 誦我即時至  
過於險難處 大海及江河 深山險隘處  
師子象虎狼 毒蟲諸神難 持我皆安穩  
若有侵燒者 頭破作七分 壽命悉長遠  
福祿自遷至  
爾時。毘那夜羅迦。說是偈已。告世人言。說處  
世陀羅尼法。最護衆生。隨其所願。皆得滿足。  
當須日夜。誦持。滿十萬遍。乃至二十萬遍。皆  
得如所說。即昇虛空。即說咒曰

(真言)

曩牟毘那夜迦<sup>上</sup>寫。訶悉知目佉<sup>上</sup>寫。怛姪  
佉。三阿智耶那智耶。<sup>二</sup>殊幡帝耶。<sup>六</sup>烏悉  
曇迦耶。<sup>七</sup>悉婆<sup>二</sup>拖鉢耶。<sup>八</sup>婆達薩寫耶。  
九婆喇跋遲。<sup>十</sup>莎訶

大聖歡喜天使咒法經

(No. 13 裏)

(題箋)

使咒法經

使咒法經  
使咒法經  
使咒法經

No. 14 15 (表) 大聖歡喜天使咒法經

(No. 14 表)

大聖歡喜天使咒法經

南天竺三藏菩提留支奉 詔譯  
爾時。毘那夜迦。於鷄羅山。集諸大衆。梵天。自  
在天。釋提桓因等。及無量億數鬼神等。從座  
而起。稽首作禮。於大自在天。請言。我今欲說。  
一字咒。饒益衆生。唯願印可。聽我所說諸天  
言。善哉。如汝所說。毘那夜迦。得說。歡喜踊躍。  
即說。毘那夜迦。一時咒曰

(オン・ギャク・ギヤ・キリク オン・カ・ウン・ハツ・タ)  
唵唐伽頤里唵訶<sup>二</sup>泮<sup>二</sup>

欲作此法。先須造像。或用白鐵。及金銀銅樺  
木等。各刻。作其形像。夫婦二身。和合相抱。立  
竝作象頭人身。其造像直。不得還價。造其像  
已。白月一日。於淨室內。用淨牛糞。磨作圓壇。  
隨意大小。當取一升。胡麻油。用上咒。咒其淨  
油。一百八遍。煙其油。以淨銅器。盛著煙油。然  
後。將像放著。銅盤油中。安置壇內。用淨銅匙。  
若銅杓等。攪油灌其。二像身頂。一百八遍。以  
後日日。更咒舊油。一百八遍。一日之中。七遍  
灌之。平旦四遍。日午三遍。共成七遍。如是作

般若理趣經

般若理趣經

般若理趣經

般若理趣經

No. 12513 大聖歡喜天使咒法經

(No. 12表)

大聖歡喜天使咒法經

南天竺三藏菩提留支奉 詔譯

爾時。毘那夜迦。於鷄羅山。集諸大眾。梵天。自在天。釋提桓因等。及無量億數鬼神等。從座而起。稽首作禮。於大自在天。請言。我今欲說。一字咒。饒益衆生。唯願印可。聽我所說諸天言。善哉。如汝所說。毘那夜迦。得說。歡喜踊躍。即說。毘那夜迦。一字咒曰

(オン・ギャク・ギャ・キリク オン・カ・ウン・ハツ・タ)

唵唐伽韻里唵訶吽

欲作此法。先須造像。或用白鐵。及金銀銅樺木等。各刻。作其形像。夫婦二身。和合相抱。立竝作。象頭人身。其造像直。不得還價。造其像已。白月一日。於淨室內。用淨牛糞。磨作圓壇。隨意大小。當取一升。胡麻油。用上咒。咒其淨油。一百八遍。煙其油。以淨銅器。盛著煙油。然後。將像放著。銅盤油中。安置壇內。用淨銅匙。若銅杓等。攪油灌其。二像身頂。一百八遍。以後日日。更咒舊油。一百八遍。一日之中。七遍灌之。平旦四遍。日午三遍。共成七遍。如是作

法。乃至七日。隨心所願。成即得稱意。正灌油時。數數發願。用酥蜜。和麴作團。蘿蔔根。并盞酢酒漿。如是。日成獻食。必須自食。方得氣力爾時。毘那羅囊伽。將領九千八百。諸大鬼王。

(No. 12裏・符丁「二」)

遊行三千世界。我等所爲。神力自在。遍歷諸方。奉衛三寶。已大慈悲。利益衆生。向於世尊。俱發聲言。我以自在神通。故號毘那羅囊伽。亦名毘那夜迦。亦名毘微那囊伽。亦曰摩訶毘那夜迦。如是四天下。稱皆不同。我於出世。

復有別名。即以神變。昇虛空。而說偈言

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 我有微妙法 | 世間甚稀有 | 衆生受持者 |
| 皆與願滿足 | 我行順世法 | 世示稀有事 |
| 我能隨其願 | 有求名遷官 | 我使國王召 |
| 有求世異寶 | 使世積珍利 | 家豐足七珍 |
| 世皆所稀有 | 有求色美者 | 發願宛然至 |
| 莫須言遠近 | 高貴及難易 | 志心於我者 |
| 我使須臾間 | 有衆生疾苦 | 顛狂及疥癩 |
| 疾毒衆不利 | 百種害加惱 | 誦我陀羅尼 |
| 無不解脫者 | 獨行暗冥處 | 依我皆無畏 |
| 却賊忽然侵 | 我皆令自縛 | 若欲自然福 |
| 若有求女人 | 夫心令得女 | 我必令相愛 |
| 世間陵突者 | 我悉令摧伏 | 逍遙自快樂 |
| 宛然無所乏 | 有念皆稱遂 | 隨有咸滿足 |
| 設衆惡來侵 | 我使如其意 | 我悉能加護 |
| 住居皆吉慶 | 宅舍悉清寧 | 男女得英名 |
| 夫妻順和合 | 上品持我者 | 我與人中王 |

一切法一性故般若波羅蜜多一性一切法究竟故般若波羅蜜多究竟金剛手若有聞

(No. 11 表・符丁「七」)

此理趣受持讀誦思惟其義彼於佛菩薩行皆得究竟

時薄伽梵毘盧遮那得一切秘密法性無戲論如來復說最勝無初中後大樂金剛不空三摩耶金剛法性般若理趣所謂菩薩摩訶薩大慾最勝成就故得大樂最勝成就菩薩摩訶薩得大樂最勝成就故則得一切如來大菩提最勝成就菩薩摩訶薩得一切如來大菩提最勝成就故則得一切如來摧大力魔最勝成就菩薩摩訶薩得一切如來摧大力魔最勝成就故則得遍三界自在主成就菩薩摩訶薩得遍三界自在主成就故則得淨除無餘界一切有情住著流轉以大精進常處生死救攝一切利益安樂最勝究竟皆悉成就何以故

菩薩勝慧者乃至盡生死恒作衆生利而不趣涅槃般若及方便智度悉加持諸法及諸有一切皆清淨慾等調世間令得淨除故有頂及惡趣調伏盡諸有如蓮體不染不爲垢所染諸慾性亦然不染利群生大慾得清淨大安樂富饒三界得自在能作堅固利金剛手若有聞此本初般若理趣日日晨朝或誦或聽彼獲一切安樂悅意大樂金剛不空三昧究竟悉地現世獲得一切法自在悅樂以十六大菩薩生得於如來執金剛位

(ウム)

爾時一切如來及持金剛菩薩摩訶薩等皆來集會欲令此法不空無礙速成就故咸共稱讚金剛手言

(No. 11 裏・符丁「八」)

善哉善哉大薩埵 善哉善哉大安樂  
善哉善哉摩訶衍 善哉善哉大智慧  
善能演說此法教 金剛修多羅加持  
持此最勝教王者 一切諸魔不能壞  
得佛菩薩最勝位 於諸悉地當不久  
一切如來及菩薩 共作如是勝說已  
爲令持者悉成就 皆大歡喜信受行  
般若理趣經

|         |         |
|---------|---------|
| 毘盧遮那佛   | 毘盧遮那佛   |
| 毘盧遮那佛   | 毘盧遮那佛   |
| 毘盧遮那佛   | 毘盧遮那佛   |
| 我我所修三昧善 | 迴向最上大悉地 |
| 哀愍攝受願海中 | 消除業障證三昧 |
| 天衆神祇增威光 | 當所權現增法樂 |
| 本尊界會增法樂 | 貴賤靈等成佛道 |
| 聖朝安穩增寶壽 | 天下安穩興正法 |
| 護持弟子除不祥 | 滅罪生善成大願 |
| 菩提行願不退轉 | 引導三有及法界 |
| 同一性故入阿字 |         |

(題箋)

般若理趣經

平等則入妙法林入一切業平等則入一切事業輪時纔發心轉法輪大菩薩欲重顯明此義故熙以微咲轉金剛輪說一切金剛三摩耶心

(ウン)

時薄伽梵一切如來種種供養藏廣大儀式如來復說一切供養最勝出生般若理趣所謂發菩提心則爲於諸如來廣大供養救濟一切衆生則爲於諸如來廣大供養受持妙典則爲於諸如來廣大供養於般若波羅蜜多受持讀誦自書教他書思惟修習種種供養則爲於諸如來廣大供養時虛空庫大菩薩欲重顯明此義故熙怡微咲說此一切事業不空三摩耶一切金剛心

(ラン)

時薄伽梵能調持智拳如來復說一切調伏智藏般若理趣所謂一切有情平等故忿怒平等一切有情調伏故忿怒調伏一切有情法性故忿怒法性一切有情金剛性故忿怒金剛性何以故一切有情調伏則爲菩提時摧一切魔大菩薩欲重顯明此義故熙怡微咲以金剛藥叉形持金剛牙恐怖一切如來已說金剛忿怒大咲心

(カク)

時薄伽梵一切平等建立如來復說一切法三摩耶最勝出生般若理趣所謂一切平等

(No. 10 裏・符丁「六」)

性故般若波羅蜜多平等性一切義利性故般若波羅蜜多義利性一切法性故般若波羅蜜多法性一切事業性故般若波羅蜜多事業性應知時金剛手入一切如來菩薩三摩耶加持三摩地說一切不空三摩耶心

(ウム)

時薄伽梵如來復說一切有情加持般若理趣所謂一切有情如來藏以普賢菩薩一切我故一切有情金剛藏以金剛藏灌頂故一切有情妙法藏能轉一切語言故一切有情羯磨藏能作所作性相應故時外金剛部欲重顯明此義故作歡喜聲說金剛自在自真實心

(チリ)

爾時七母女天頂禮佛足獻鉤召攝入能殺能成三摩耶真實心

(ビユ)

爾時末時迦羅天三兄弟等親禮佛足獻自心眞言

(ソバ)

爾時四姊妹女天獻自心眞言

(カン)

時薄伽梵無量無邊究竟如來爲欲加持此教令究竟圓滿故復說平等金剛出生般若理趣所謂般若波羅蜜多無量故一切如來無量般若波羅蜜多無邊故一切如來無邊

無戲論性故一切法無戲論性一切法無戲論性故應知般若波羅蜜多無戲論性金剛手若有聞此理趣受持讀誦設害三界一切有情不墮惡趣爲調伏故疾證無上正等菩提時金剛手大菩薩翌重顯明此義故持降三世印以蓮華面微笑而怒頻眉猛視利牙出現住降伏立相說此金剛吽迦羅心

(ウム)

時薄伽梵得自性清淨法性如來復說一切法平等觀自在智印出生般若理趣所謂世間一切慾清淨故即一切瞋清淨世間一切垢清淨故即一切罪清淨世間一切法清淨故即一切有情清淨世間一切智智清淨故即般若波羅蜜多清淨金剛手若有聞此理趣受持讀誦作意思惟設住諸慾猶如蓮華不爲客塵諸垢所染疾證無上正等菩提時薄伽梵觀自在大菩薩欲重顯明此義故熙怡微笑作開敷蓮華勢觀慾不染說一切群生種種色心

(キルク)

時薄伽梵一切三界主如來復說一切如來灌頂智藏般若理趣所謂以灌頂施故能得

(No. 9 裏・符丁「四」)

三界法王位義利施故得一切意願滿足以法施故得圓滿一切法資生施故得身口意一切安樂時虛空藏大菩薩欲重顯明此義故熙怡微笑以金剛寶鬘自繫其首說一切

灌頂三摩耶寶心

(タラン)

時薄伽梵得一切如來智印如來復說一切如來智印加持般若理趣所謂持一切如來身印即爲一切如來身持一切如來語印即得一切如來法持一切如來心印即證一切如來三摩地持一切如來金剛印即成就一切如來身口意業最勝悉地金剛手若有聞此理趣受持讀誦作意思惟得一切自在一切智智一切事業一切成就得一切身口意金剛性一切悉地疾證無上正等菩提時薄伽梵爲欲重顯明此義故熙怡微笑持金剛拳大三摩耶印說此一切堅固金剛印悉地三摩耶自眞實心

(アク)

時薄伽梵一切無戲論如來復說轉字論般若理趣所謂諸法空與無自性相應故諸法無相與無相性相應故諸法無願與無願性相應故諸法光明般若波羅蜜多清淨故時文殊師利童眞欲重顯明此義故熙怡微笑以自劔揮斫一切如來以說此般若波羅蜜多最勝心

(アン)

時薄伽梵一切如來入大輪如來復說入大

(No. 10 表・符丁「五」)

輪般若理趣所謂入金剛平等則入一切如來法輪入義平等則入大菩薩輪入一切法

自在能作一切如來一切印平等種種事業  
於無盡無餘一切衆生界一切意願作業皆  
悉圓滿常恒三世一切時身語意業金剛大  
毘盧遮那如來在於欲界他化自在天王宮  
中一切如來常所遊處吉祥稱歎大摩尼殿  
種種間錯鈴鐸繪幡微風搖擊珠鬘瓔珞半  
滿月等而爲莊嚴與八十俱二菩薩衆俱所  
謂金剛手菩薩摩訶薩觀自在菩薩摩訶薩  
虛空藏菩薩摩訶薩金剛拳菩薩摩訶薩文  
殊師利菩薩摩訶薩繞發心轉法輪菩薩摩  
訶薩虛空庫菩薩摩訶薩摧一切魔菩薩摩  
訶薩與如是等大菩薩衆恭敬圍繞而爲說  
法初中後善文義巧妙純一圓滿清淨潔白  
說一切法清淨句門所謂妙適清淨句是菩  
薩位慾箭清淨句是菩薩位觸清淨句是菩  
薩位愛縛清淨句是菩薩位一切自在主清  
淨句是菩薩位見清淨句是菩薩位適悅清  
淨句是菩薩位愛清淨句是菩薩位慢清淨

(No. 8裏・符丁「二」)

句是菩薩位莊嚴清淨句是菩薩位意滋澤  
清淨句是菩薩位光明清淨句是菩薩位身  
樂清淨句是菩薩位色清淨句是菩薩位聲  
清淨句是菩薩位香清淨句是菩薩位味清  
淨句是菩薩位何以故一切法自性清淨故  
般若波羅蜜多清淨金剛手若有聞此清淨  
出生句般若理趣乃至菩提道場一切蓋障  
及煩惱障法障業障設廣積習必不墮於地

獄等趣設作重罪消滅不難若能受持日日  
讀誦作意思惟卽於現生證一切法平等金  
剛三摩地於一切法皆得自在受於無量適  
悅歡喜以十六大菩薩生獲得如來執金剛  
位時薄伽梵一切如來大乘現證三摩耶一  
切曼荼羅持金剛勝薩埵於三界中調伏無  
餘一切義成就金剛手菩薩摩訶薩爲欲重  
顯明此義故熙怡微笑左手作金剛慢印右  
手抽擲本初大金剛作勇進勢說大樂金剛  
不空三摩耶心

(ウム)

時薄伽梵毘盧遮那如來復說一切如來寂  
靜法性現等覺出生般若理趣所謂金剛平  
等現等覺以大菩提金剛堅固故義平等現  
等覺以大菩提一義利故法平等現等覺以  
大菩提自性清淨故一切業平等現等覺以  
大菩提一切分別無分別性故金剛手若有  
聞此四出生法讀誦受持設使現行無量重  
罪必能超越一切惡趣乃至當坐菩提道場  
速能尅證無上正覺時薄伽梵如是說已欲  
(No. 9表・符丁「三」)  
重顯明此義故熙怡微笑持智拳印說一切  
法自性平等心

(アク)

時調伏難調釋迦牟尼如來復說一切法平  
等最勝出生般若理趣所謂慾無戲論性故  
瞋無戲論性瞋無戲論性故癡無戲論性癡

衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅  
摩睺羅伽人非人等故受是瓔珞即時觀世  
音菩薩愍諸四衆及於天龍人非人等受其  
瓔珞分作二分一分奉釋迦牟尼佛一分奉  
多寶佛塔無盡意觀世音菩薩有如是自在  
神力遊於娑婆世界爾時無盡意菩薩以偈  
問曰

世尊妙相具我今重問彼佛子何因緣名爲觀世音  
具足妙相尊偈答無盡意汝聽觀音行善應諸方所  
弘誓深如海歷却不思議侍多千億佛發大清淨願  
我爲汝略說聞名及見身心念不空過能滅諸有苦  
假使興害意推落大火坑念彼觀音力火坑變成池  
或漂流巨海龍魚諸鬼難念彼觀音力波浪不能沒  
或在須彌峰爲人所推墮念彼觀音力如日虛空住  
或被惡人逐墮落金剛山念彼觀音力不能損一毛  
或值怨賊繞各執刀加害念彼觀音力咸即起慈心  
或遭王難苦臨刑欲壽終念彼觀音力刀尋段段壞  
或囚禁枷鎖手足被杻械念彼觀音力釋然得解脫  
咒詛諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還著於本人  
或遇惡羅刹毒龍諸鬼等念彼觀音力時悉不敢害  
若惡獸圍繞利牙爪可怖念彼觀音力疾走無邊方  
蚺蛇及蝮蟻氣毒煙火然念彼觀音力尋聲自迴去  
(No. 7 表·符丁「五」)

雲雷鼓掣電降雹澍大雨念彼觀音力應時得消散  
衆生被困厄無量苦逼身觀音妙智力能救世間苦  
具足神通力廣修智方便十方諸國土無刹不現身  
種種諸惡趣地獄鬼畜生生老病死苦以漸悉令滅

眞觀清淨觀廣大智慧觀悲觀及慈觀常願常瞻仰  
無垢清淨光慧日破諸闇能伏災風火普明照世間  
悲體戒雷震慈意妙大雲澍甘露法雨滅除煩惱蝕  
諍訟經官處怖畏軍陣中念彼觀音力衆怨悉退散  
妙音觀世音梵音海潮音勝彼世間音是故須常念  
念念勿生疑觀世音淨聖於苦惱死厄能爲作依怙  
具一切功德慈眼視衆生福聚海無量是故應頂禮  
爾時持地菩薩即從座起前白佛言世尊若  
有衆生聞是觀世音菩薩品自在之業普門  
示現神通力者當知是人功德不少佛說是  
普門品時衆中八萬四千衆生皆發無等等  
阿耨多羅三藐三菩提心  
(題箋)

普門品

### No. 8 11 大樂金剛不空眞實三摩耶般若波羅蜜多理趣品

(No. 8 表)

歸命毘盧遮那佛 無染無著眞理趣  
生生值遇無相教 世世持誦不忘念  
護持本尊增法樂

大樂金剛不空眞實三摩耶經  
般若波羅蜜多理趣品

大興善寺三藏沙門大廣智不空奉 詔譯  
如是我聞一時薄伽梵成就殊勝一切如來  
金剛加持三摩耶智已得一切如來灌頂寶  
冠爲三界主已證一切如來一切智智瑜伽

便得離癡無盡意觀世音菩薩有如是等大威神力多所饒益是故衆生常應心念

若有女人設欲求男禮拜供養觀世音菩薩便生福德智慧之男設欲求女便生端正有相之女宿植德本衆人愛敬無盡意觀世音菩薩有如是力若有衆生恭敬禮拜觀世音菩薩福不唐捐

是故衆生皆應受持觀世音菩薩名號無盡意若有人受持六十二億恒河沙菩薩名字復盡形供養飲食衣服臥具醫藥於汝意云何是善男子善女人功德多不無盡意言甚多世尊佛言若復有人受持觀世音菩薩名號乃至一時禮拜供養是二人福正等無異於百千萬億却不可窮盡無盡意受持觀世音菩薩名號得如是無量無邊福德之利無盡意菩薩白佛言世尊觀世音菩薩云何遊此娑婆世界云何而爲衆生說法方便之力其事云何佛告無盡意菩薩善男子若有

(No. 6 表・符丁「三」)

國土衆生應以佛身得度者觀世音菩薩即現佛身而爲說法應以辟支佛身得度者即現辟支佛身而爲說法應以聲聞身得度者即現聲聞身而爲說法應以梵王身得度者即現梵王身而爲說法應以帝釋身得度者即現帝釋身而爲說法應以自在天身得度者即現自在天身而爲說法應以大自在天身得度者即現大自在天身而爲說法應以

天大將軍身得度者即現天大將軍身而爲說法應以毘沙門身得度者即現毘沙門身

而爲說法應以小王身得度者即現小王身

而爲說法應以長者身得度者即現長者身

而爲說法應以居士身得度者即現居士身

而爲說法應以宰官身得度者即現宰官身

而爲說法應以婆羅門身得度者即現婆羅門身而爲說法應以比丘比丘尼優婆塞優

婆夷身得度者即現比丘比丘尼優婆塞優

婆夷身而爲說法應以長者居士宰官婆羅

門婦女身得度者即現婦女身而爲說法應

以童男童女身得度者即現童男童女身而

爲說法應以天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓

羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身得度者即

皆現之而爲說法應以執金剛神得度者即

現執金剛神而爲說法無盡意是觀世音菩

薩成就如是功德以種種形遊諸國土度脫

衆生是故汝等應當一心供養觀世音菩薩

是觀世音菩薩摩訶薩於怖畏急難之中能

施無畏是故此娑婆世界皆號之爲施無畏

(No. 6 裏・符丁「四」)

者無盡意菩薩白佛言世尊我今當供養觀

世音菩薩即解頸衆寶珠瓔珞價直百千兩

金而以與之作是言仁者受此法施珍寶瓔

珞時觀世音菩薩不<sub>レ</sub>受之無盡意復白觀

世音菩薩言仁者愍我等故受此瓔珞爾時

佛告觀世音菩薩當愍此無盡意菩薩及四

## 資料 1

## 心城院版木 銘文

### No. 3 觀音坐像

大悲大名稱

吉祥安樂人

恒說吉祥句

救濟極苦者

### No. 4 日之出大黑天像

傳教大師御作

日之出大黑尊天

法緣衆生緣

無邊緣福壽

增長

### No. 5 妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

(No. 5 表)

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五  
爾時無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌  
向佛而作是言世尊觀世音菩薩以何因緣  
名觀世音佛告無盡意菩薩善男子若有無  
量百千萬億衆生受諸苦惱聞是觀世音菩  
薩一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆  
得解脫  
若有持是觀世音菩薩名者設入大火火不

能燒由是菩薩威神力故

若爲大水所漂稱其名號即得淺處

若有百千萬億衆生爲求金銀瑠璃磚磲碼

瑙珊瑚琥珀眞珠等寶入於大海假使黑風

吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一

人稱觀世音菩薩名者是諸人等皆得解脫

羅刹之難以是因緣名觀世音

若復有人臨當被害稱觀世音菩薩名者彼

所執刀杖尋段段壞而得解脫

若三千大千國土滿中夜叉羅刹欲來惱人

聞其稱觀世音菩薩名者是諸惡鬼尚不能

以惡眼視之況復加害

設復有人若有罪若無罪枷鎖檢繫其

身稱觀世音菩薩名者皆悉斷壞即得解脫

若三千大千國土滿中怨賊有一商主將諸

商人齎持重寶經過險路其中一人作是唱

(No. 5 裏・符丁「三」)

言諸善男子勿得恐怖汝等應當一心稱觀

世音菩薩名號是菩薩能以無畏施於衆生

汝等若稱名者於此怨賊當得解脫衆商人

聞俱發聲言南無觀世音菩薩稱其名故即

得解脫

無盡意觀世音菩薩摩訶薩威神之力巍巍

如是

若有衆生多於姪欲常念恭敬觀世音菩薩

便得離欲若多瞋恚常念恭敬觀世音菩薩

便得離瞋若多愚癡常念恭敬觀世音菩薩